



彩の国さいたま

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第206集

浦和市

外東／神田天神後／大久保条里

荒川第2調節池建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

— II —

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第 2 号周清出土土器



第 3 号周清出土土器



第4号周溝出土土器



第15号周溝出土土器

序

埼玉県の中央部を流れる荒川は、生活にうるおいを与える恵みの川として、県民に親しまれています。荒川が現在の流路になるまでには、古くから幾度かの瀬替えや河川の改修がありました。私たちの先人は、荒川の治水に多くの努力を傾けてきました。

建設省では全国の河川治水事業の一環として、荒川において調節池の建設が進められています。この計画は、埼玉県戸田市から吉見町にかけて流れる荒川の各所に5つの治水機能を有する調節池を建設しようとするものです。

すでに平成4年度から計画が具体化され、荒川第1調節池の建設は完了いたしました。このたび、浦和市域において第2調節池の建設が行われることになりました。

荒川第2調節池建設地は、自然堤防上の微高地と低地からなり、弥生時代から古代の集落跡や古墳群が展開し、低地には古代の水田跡が広がっていることが知られておりました。

これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関で慎重に協議をかさねてまいりましたが、このたび記録保存の措置を講じることになりました。そのため発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が建設省荒川上流工事事務所の委託を受け、実施いたしました。

その結果、平成5年度には五関中島遺跡と堤根遺跡の発掘調査が行われ、平成8年度にはこれら2遺跡の発掘調査報告書が刊行されました。今回刊行いたします外東遺跡、神田天神後遺跡、大久保条里遺跡の3遺跡は、平成6年度から平成9年度に発掘調査されたもので、2冊目の報告書となります。

発掘調査の結果、原始から古代の私たちの祖先が荒

川低地を開拓した力強い営みについて、手がかりを得ることができました。

神田天神後遺跡では、古墳時代前期と平安時代の住居跡が発見されました。外東遺跡では、数多く重なった周溝や溝が検出され、弥生時代から古墳時代にかけての多くの土器が出土しました。当時の人々の活発な生活の様子をかいま見ることが出来ます。また、古墳時代後期の古墳跡が発見され、大久保古墳群の一部を調査することができました。奈良・平安時代の住居跡は、隣の大久保条里遺跡を残した人々の衣・食・住の舞台でもあったと考えられます。

大久保条里遺跡では、東西または南北方向に伸びる畦畔や溝など水田の痕跡を示す遺構が発見されました。これらの遺構に伴って平安時代の土器片がわずかながら出土し、土壌から10世紀の銅銭である太平通寶が出土しました。これらの水田が営まれた時代を考えると、貴重な資料を提供したといえるでしょう。

本書はこれらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査から本書の刊行に至るまで御指導、御協力いただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、建設省荒川上流工事事務所、浦和市教育委員会ならびに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒 井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県浦和市に所在する外東遺跡、神田天神後遺跡、大久保条里遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。

外東遺跡 (STHGS)
浦和市大字塚本字外東486他
平成6年5月11日付け教文第2—29号
神田天神後遺跡 (01—254)
浦和市大字神田字天神後1193番地他
平成7年12月28日付け教文第2—160号
大久保条里遺跡 (OOKBJR)
浦和市大字塚本字歌舞伎1138—2番地他
平成8年1月9日付け教文第2—162号
平成8年4月19日付け教文第2—16号
平成9年11月10日付け教文第2—133号
3. 発掘調査は、荒川第2調節池建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、建設省荒川上流工事事務所の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち、発掘調査については、外東遺跡は、西口正純、君島勝秀が平成6年4月1日から平成6年7月31日まで実施した。神田天神後遺跡については、田中英司、田中正夫が平成7年10月1日から平成7年11月30日まで実施した。大久保条里遺跡については、平成7年度は田中英司、田中正夫が、平成8年度は田中英司、伴瀬宗一が、平成9年度は伴瀬宗一、末木啓介がそれぞれ担当し、平成7年12月1日から平成8年11月30日と、平成9年11月1日から平成10年3月31日まで実施した。整理報告書作成事業は君島が担当し、平成10年4月1日から平成11年3月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量、航空写真撮影、航空写真測量に関しては、外東遺跡については、新日本航測株式会社に基づ点測量と航空写真撮影を委託した。神田天神後遺跡については、新日本航測株式会社に基準点測量を、株式会社シン技術コンサルに航空写真撮影を委託した。大久保条里遺跡A～D区については、新日本航測株式会社に基準点測量と航空写真測量を委託した。大久保条里遺跡E・F区については、株式会社ムサシノに基準点測量を、株式会社東京航業研究所に、航空写真測量を委託した。
6. 自然科学分析については、外東遺跡、神田天神後遺跡、大久保条里遺跡A～D区の土壌分析を株式会社古環境研究所に、大久保条里遺跡E、F区の土壌分析をバリノ・サーヴェイ株式会社、外東遺跡、神田天神後遺跡出土土器の胎土分析を第四紀地質研究所にそれぞれ委託した。
7. 遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は、田中英司、西口、田中正夫、伴瀬、末木、君島が行い、遺物の写真撮影は君島が行った。
9. 出土品の整理及び図版の作成は、君島が行い、鉄製品については瀧瀬芳之の協力を得た。
10. 本書の執筆はI—1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、他は君島が行った。
11. 本書の編集は、君島があつた。
12. 本書にかかる資料は平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

凡例

1. 本書におけるX, Yによる座標数値は、国土標準平面直角座標IX系に基づく座標値を示している。各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
2. グリッドの区画は、各遺跡の全体図に示した。グリッド名は、10mを1単位とし、北西隅の枕名称を用いた。
3. 挿入図の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構：住居跡・掘立柱建物跡・土墳・井戸跡 1/60
古墳 1/200 古墳土層図 1/60
周溝 1/100 周溝土層図 1/80
遺物：土器実測図 1/4 土器拓影図 1/3
土製品 1/2 石製品 1/3 おろし金 1/4
鉄器 1/3 銅銭 1/2
その他のものは、スケールと縮尺率をその都度表して示した。
4. 本書における遺構の略号は原則として以下のとおりである。
S J (住居跡) SB (掘立柱建物跡) SK (土墳)
SD (溝) SE (井戸跡) SS (古墳)
SR (周溝) P (ビット)
例 E-8GP₃(E-8グリッド第3号ビット)
5. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。
6. 遺構図および遺物実測図中のスクリーン・トーンは住居内の炉跡および土器の赤彩範囲を示す。
7. 実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。
8. 遺構図・遺物分布図中に示したドットと線は遺物の出土位置と接合関係を示し、番号は遺物実測図のそれと一致する。
9. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・法量の()内の数値は推定値であり、単位はcmである。
 - ・胎土は主に肉眼で観察された含有物を以下の記号に示した。
B: 黒色粒子 R: 赤色粒子 W: 白色粒子
褐: 褐色粒子 雲: 雲母 灰: 灰色粒子
針: 白色針状物質 砂: 大粒の砂粒
 - ・焼成はA(良好) B(普通) C(不良)の3ランクに分類した。
 - ・色調は「新版標準土色帳」(農林省水産技術会議事務局監修1967)に照らし、最も近似した色相を記した。
 - ・残存率は、実測図に現した部位を100%として算定したもので、5%刻みで表した。

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	4. 溝・ビット	103
1. 調査に至る経過	1	V 大久保条里遺跡	110
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	1. 遺跡の概要	110
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4	2. 遺構と遺物	122
II 遺跡の立地と環境	6	(1) A区	122
III 外東遺跡	17	(2) B区	125
1. 遺跡の概要	17	(3) C区	130
2. 弥生時代後期・古墳時代前期	20	(4) D区	135
(1) 周溝・溝	20	(5) E区	137
(2) 土壌	50	(6) F区	140
(3) ビット	52	(7) 調査区出土の縄文土器	148
3. 古墳時代後期	56	VI 結語	149
4. 奈良・平安時代	66	付編	
5. 近世以降	77	外東遺跡の土層とテフラ	163
(1) 溝	77	大久保条里遺跡A・B区の土層とテフラ	165
(2) 井戸跡	79	大久保条里遺跡C・D区の土層とテフラ	170
IV 神田天神後遺跡	81	大久保条里遺跡E・F区の自然科学分析	175
1. 遺跡の概要	81	外東遺跡・神田天神後遺跡	
2. 住居跡・掘立柱建物跡	83	出土土器の胎土分析	196
3. 土壌	99		

挿 図 目 次

第 1 図	埼玉県の地形	6	第 37 図	第 2・3号溝	43
第 2 図	外東遺跡・神田天神後遺跡と周辺遺跡	7	第 38 図	第 7・10~13・15・17号溝	44
第 3 図	遺跡位置図(外東遺跡・神田天神後遺跡)	10	第 39 図	第 10・11・15号溝遺物分布図	45
第 4 図	大久保条里遺跡と周辺遺跡	12	第 40 図	第 7号溝出土遺物	47
第 5 図	遺跡位置図(大久保条里遺跡)	14	第 41 図	第 10号溝出土遺物	47
第 6 図	検出された主な遺構(大久保条里遺跡)	16	第 42 図	第 11号溝出土遺物	48
第 7 図	外東遺跡全体図	18	第 43 図	第 15号溝出土遺物	49
第 8 図	外東遺跡基本土層	19	第 44 図	第 17号溝出土遺物	49
第 9 図	第 1号周溝	20	第 45 図	土壌	51
第 10 図	第 1号周溝出土遺物	21	第 46 図	土壌出土遺物	52
第 11 図	第 2号周溝	22	第 47 図	ピット (1)	53
第 12 図	第 2号周溝出土遺物	23	第 48 図	ピット (2)	54
第 13 図	第 3号周溝・第 6・8号溝	24	第 49 図	ピット出土遺物	54
第 14 図	第 3号周溝遺物分布図	25	第 50 図	ピット計量グラフ	55
第 15 図	第 3号周溝出土遺物	25	第 51 図	第 1号墳	57
第 16 図	第 4号周溝	26	第 52 図	第 1号墳土層	58
第 17 図	第 4号周溝遺物分布図	27	第 53 図	第 1号墳遺物分布図	59
第 18 図	第 4号周溝出土遺物 (1)	28	第 54 図	第 1号墳出土遺物 (1)	60
第 19 図	第 4号周溝出土遺物 (2)	29	第 55 図	第 1号墳出土遺物 (2)	61
第 20 図	第 5号周溝	30	第 56 図	第 1号墳出土遺物 (3)	62
第 21 図	第 5号周溝出土遺物	31	第 57 図	第 1号墳出土遺物 (4)	63
第 22 図	第 6~8号周溝・第 9号溝	32	第 58 図	第 1号住居跡	66
第 23 図	第 6号周溝出土遺物	33	第 59 図	第 2号住居跡	67
第 24 図	第 9号周溝	34	第 60 図	第 2号住居跡出土遺物	67
第 25 図	第 9号周溝出土遺物	35	第 61 図	第 3~5号住居跡	68
第 26 図	第 10号周溝	36	第 62 図	第 4号住居跡出土遺物	69
第 27 図	第 10号周溝出土遺物	36	第 63 図	第 6号住居跡	70
第 28 図	第 11号周溝・第 14号溝	37	第 64 図	第 6号住居跡出土遺物	70
第 29 図	第 11号周溝・第 14号溝出土遺物	37	第 65 図	第 7号住居跡	71
第 30 図	第 12号周溝・第 18号溝	38	第 66 図	第 7号住居跡出土遺物	71
第 31 図	第 12号周溝出土遺物	39	第 67 図	第 8号住居跡出土遺物	72
第 32 図	第 13号周溝	40	第 68 図	第 8・9号住居跡	73
第 33 図	第 14号周溝・出土遺物	40	第 69 図	第 9号住居跡出土遺物	74
第 34 図	第 15号周溝	41	第 70 図	第 10号住居跡	74
第 35 図	第 15号周溝出土遺物	41	第 71 図	第 11号住居跡・出土遺物	75
第 36 図	第 16号周溝	42	第 72 図	第 12号住居跡	76

第73図	第12号住居跡出土遺物	76	第111図	ビット	108
第74図	第1・4号溝	77	第112図	ビット出土遺物	108
第75図	第5号溝	77	第113図	ビット計量グラフ	109
第76図	第16・20・21号溝	78	第114図	調査範囲と周辺の地形	112
第77図	第19号溝	78	第115図	大久保条里遺跡全体図・基本土層	114
第78図	井戸跡	79	第116図	A区全体図	116
第79図	神田天神後遺跡基本土層	81	第117図	B区全体図	117
第80図	神田天神後遺跡全体図	82	第118図	C区全体図	118
第81図	第1号住居跡出土遺物	83	第119図	D区全体図	119
第82図	第1号住居跡	84	第120図	E区全体図	120
第83図	第2号住居跡・出土遺物	85	第121図	F区全体図	121
第84図	第3号住居跡	86	第122図	A区遺構	123
第85図	第3号住居跡出土遺物	87	第123図	A区遺構土層	124
第86図	第4号住居跡	87	第124図	A区出土遺物	124
第87図	第5号住居跡	88	第125図	B区遺構(1)	126
第88図	第5号住居跡遺物分布図・出土遺物	88	第126図	B区遺構(1)出土遺物	127
第89図	第6・11号住居跡	89	第127図	B区遺構(2)・出土遺物	128
第90図	第6・11号住居跡遺物分布図	90	第128図	B区遺構(3)	129
第91図	第6号住居跡出土遺物	91	第129図	C区遺構(1)	131
第92図	第7号住居跡	92	第130図	C区遺構(2)・出土遺物	132
第93図	第7号住居跡遺物分布図	93	第131図	C区遺構(3)・出土遺物	133
第94図	第7号住居跡出土遺物	93	第132図	C区土壌	134
第95図	第7号住居跡掘り方	94	第133図	D区遺構・出土遺物	136
第96図	第8号住居跡	95	第134図	E区遺構・出土遺物	138
第97図	第8号住居跡出土遺物	96	第135図	E区遺構土層	139
第98図	第8号住居跡遺物分布図	96	第136図	F区遺構(1)	141
第99図	第9号住居跡	97	第137図	F区遺構(2)	142
第100図	第10号住居跡	97	第138図	F区遺構(3)	143
第101図	第10号住居跡出土遺物	98	第139図	F区土壌(1)・出土遺物	145
第102図	第1号掘立柱建物跡	98	第140図	F区土壌(2)	146
第103図	第1・6・8号土壌	100	第141図	調査区出土の縄文土器	148
第104図	第2・3号土壌	100	第142図	外東遺跡の周溝	150
第105図	第4号土壌	101	第143図	鍛冶谷・新田口遺跡の方形周溝墓	151
第106図	第5・7・9・10号土壌	101	第144図	外東遺跡出土土器	154
第107図	土壌出土遺物	102	第145図	周辺遺跡の出土土器	156
第108図	溝・ビット	104	第146図	遺構計量グラフ	159
第109図	溝土層	106	第147図	検出された区割り溝と現況地割	160
第110図	溝出土遺物	107			

図版目次

- 図版1 外束遺跡・神田天神後遺跡・
大久保条里遺跡遠景
- 図版2 外束遺跡遠景
- 図版3 外束遺跡調査区
- 図版4 第1号周溝・第3号周溝遺物出土状況
- 図版5 第4号周溝内土壌・遺物出土状況
- 図版6 第9号周溝・遺物出土状況
- 図版7 第10・12・13号周溝
- 図版8 第14・15号周溝
- 図版9 第16号周溝・E-8GP₃遺物出土状況
- 図版10 第1号墳・遺物出土状況
- 図版11 第1・2号住居跡
- 図版12 第3・4号住居跡
- 図版13 第6・7号住居跡
- 図版14 第8～10号住居跡
- 図版15 第1・2号周溝出土遺物
- 図版16 第3・4号周溝出土遺物
- 図版17 第4・6号周溝出土遺物
- 図版18 第6・9・10号周溝出土遺物
- 図版19 第12・15号周溝・第10・11号溝出土遺物
- 図版20 第11・15号溝・E-8GP₃出土遺物
- 図版21 第1号墳出土遺物
- 図版22 第1号墳・第6・8・11号住居跡出土遺物
- 図版23 神田天神後遺跡遠景
- 図版24 第1・2号住居跡
- 図版25 第3・5・9号住居跡
- 図版26 第6・7号住居跡
- 図版27 第8号住居跡・第10号住居跡カマド
- 図版28 第2～4号土壌・第1・2・4号溝
- 図版29 第3・7～9号溝・調査区全景
- 図版30 第1・2・5・6号住居跡出土遺物
- 図版31 第6号住居跡出土遺物
- 図版32 第7・8・10号住居跡・第7号溝出土遺物
- 図版33 第1・4号土壌・B-2GP₁出土遺物
- 図版34 大久保条里遺跡遠景
- 図版35 大久保条里遺跡A・B区
- 図版36 大久保条里遺跡A・B区
- 図版37 第2～6号溝・第1号畦畔
- 図版38 第1号畦畔・第1号竪穴状遺構
- 図版39 第9・10・12・13号溝
- 図版40 第15～19号溝
- 図版41 第20～29号溝
- 図版42 第2・4号畦畔
- 図版43 大久保条里遺跡C・D区
- 図版44 大久保条里遺跡C・D区
- 図版45 第33～38号溝
- 図版46 第36～42号溝・第6・7号畦畔
- 図版47 第43～46・52号溝・第8号畦畔
- 図版48 第47～50号溝・第1号土壌
- 図版49 第4号土壌・第54・55号溝
- 図版50 第58～63号溝
- 図版51 大久保条里遺跡E・F区
- 図版52 大久保条里遺跡E・F区
- 図版53 第69～79号溝
- 図版54 第80～85・90号溝
- 図版55 第91号溝・第11号畦畔
- 図版56 第99・110～116・118～120号溝
- 図版57 第10・14・16・18・24・25B号土壌

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県の中央に広大な流域を有する荒川の治水は、県土の利用にとって重要な課題の一つである。建設省では、荒川治水機能を高めるため、吉見町から戸田市の間に、新たに5ヶ所の調節池の建設を計画した。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした各種開発事業に対応するため、開発部局と事前協議を行い、文化財保護課と開発事業との調整を進めているところである。

これらの調節池のうち、荒川第2調節池建設事業にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所長より、埼玉県教育委員会教育長あて、平成4年9月8日付け荒上調第53号で紹介があった。これに対し文化財保護課では確認調査を行い、その結果をもとに平成6年1月5日付け教文第937号、「荒川第2調節池堤防拡張工事地内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」等で、建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所長あて、次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

遺跡名(No.)	種別	時代	所在地
外東遺跡 (No.01-059)	集落跡	古墳	浦和市大字塚本 字外東486他
神田天神後遺跡 (No.01-254)	集落跡	弥生・古墳	浦和市大字神田 字天神後1193番 地他
大久保条里遺跡 (No.01-248)	条里遺構	奈良・平安	浦和市大字塚本 字歌舞伎1138-2 番地他

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望

ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施期間である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等の問題をを中心に協議が行われた。その結果、外東遺跡を平成6年4月1日から7月31日、神田天神後遺跡を平成7年10月1日から11月30日、大久保条里遺跡を平成7年12月1日から平成8年3月31日の期間で発掘調査を実施することで協議が整い、その旨関係各機関に通知した。

発掘調査に先立って、建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所長から文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは同法第57条第1項の規定に基づく発掘調査届けが提出され、発掘調査が実施された。

なお、調査届けに対する文化庁長官からの指示通知番号は次のとおりである。

外東遺跡

平成6年5月11日付け 教文第2-29号

神田天神後遺跡

平成7年12月28日付け 教文第2-160号

大久保条里遺跡

平成8年1月9日付け 教文第2-162号

平成8年4月19日付け 教文第2-16号

平成9年11月10日付け 教文第2-133号

(文化財保護課)

2.発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

外東遺跡

調査期間は平成6年4月1日から同年7月31日までである。調査面積は3000㎡である。

4月上旬に建設省荒川上流工事事務所との打ち合わせを行い、調査範囲の確認を行った。4月15日から27日まで、表土除去作業を重機を用いて行い、直ちに遺構確認作業に入った。この時点で、幅約5mの古墳の周溝が確認され、この古墳周溝に切られる形で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと思われる多数の溝が確認された。基準点測量は5月上旬に行い、遺構実測、遺物分布図の作成が可能な状況にした。本格的な遺構の精査は、5月の初旬から始めた。最初に、第1号墳の周溝の精査、遺物の取り上げから行い、完掘後、周囲の溝と周溝の精査に取り掛かった。溝と周溝は互いに激しく重複した状態で、切り合いの新旧関係を把握することに細心の注意を払いながら精査を進めた。

6月下旬には調査区の北半部の第1号墳および周囲の溝、周溝の精査と遺構実測をほぼ終えて、7月から調査区南部の住居跡、周溝、土壌の調査に移った。7月下旬にはすべての遺構の精査を終え、残りの遺構の実測作業を行った。遺構精査を完了後、古環境研究所の委託によって、基本土層と遺構覆土のテフラ分析を行った。7月27日に空中写真撮影を実施し、好天に恵まれて完了した。7月30日までに危険箇所の埋め戻し、遺物、図面などの記録類の引き上げ、プレハブ事務所を解体し、調査を終了した。

神田天神後遺跡

調査期間は平成7年10月1日から同年11月30日までである。調査面積は823㎡である。10月上旬に荒川上流工事事務所との打ち合わせを行い、プレハブ事務所を設置を行った。10月16日に作業用のユニットを設置し、調査区域の囲柵を設置した。翌17日から20日まで、調査区内の表土除去作業を重機を用いて行った。遺構確認作業は10月20日から24日まで行い、古墳時代前期

の住居跡を多数確認した。基準点測量は10月下旬に行った。遺構の精査は住居跡からはじめて順次土壌、溝、ピットと掘り進め、完掘した遺構から実測に取り掛かった。11月30日にはすべての遺構の精査を完了した。

大久保条里遺跡

調査期間は平成7年12月1日から平成8年11月30日、および平成9年11月1日から平成10年3月31日までで、調査対象総面積は22,500㎡である。調査対象範囲は現在の荒川左岸堤防に沿った荒川第2調節池の築堤工事に関わる区域である。全長570m、幅30～35mの帯状になる。途中横断道路により調査区を6ヶ所に区切り、南からアルファベット順にA～F区とした。

調査区の四方は、崩落防止のため傾斜をつけ、出水に備えて排水用の溝を巡らせた。そのため実際の調査区域は、全長570m、幅30～35mの帯状になる。

A・B区 調査期間は平成7年12月1日から平成8年3月31日までで、調査面積は8,000㎡である。

調査区内は厚さ1mから1.5mにおよぶ川砂の客土があり、この崩落をさけるために傾斜をつけて掘削し、深さ1mで平場をつくった。遺構の確認面は、現地表から約2mの深さに達した。湧水があったため、調査区の周囲に排水用の溝を掘削した後、重機を用いて客土と表土の除去作業を行った。

A区で検出された遺構は、溝6条、畦畔1条、盛土遺構1基、竪穴状遺構1基である。B区で検出された遺構は、溝23条、畦畔3条である。古環境研究所に委託して基本土層と溝の覆土から土壌を採取し、科学分析を行った。分析内容はテフラ分析、プラント・オーバー、花粉分析、放射性炭素C14年代測定である。遺構の精査を全て終了した後、空中写真測量を行った。

C・D区 調査期間は、平成8年4月1日から同年11月30日までである。調査面積は6,500㎡である。

C区から検出された遺構は、溝26条、畦畔6条、土壌4基である。D区から検出された遺構は溝10条である。古環境研究所に委託して、基本土層、および溝の

覆土、畦畔から土壌をサンプリングし、科学分析を行った。分析内容はテフラ分析、花粉分析、プラント・オパール、種子同定、および放射性炭素C14年代測定である。遺構の精査を全て終了した後、空中写真測量を行った。

E・F区 調査期間は平成9年11月1日から平成10年3月31日までである。調査面積は8,000㎡である。

E区から検出された遺構は、溝25条である。F区から検出された遺構は、溝23条、畦畔1条、土壇26基である。バリノ・サーヴェイに委託して、基本土層および土壇の覆土から土壌を採取し、科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定、鉱物分析、珪藻分析、種実同定、土壌化学分析である。遺構の精査を全て終了した後、空中写真測量を行った。

(2) 報告書作成

平成10年4月1日から平成11年3月31日までの期間実施した。4月から出土遺物の接合・復元作業を行

い、並行して図面・写真類の整理を行った。7月から遺構図面の第2次原因の作成、10月から遺構図のトレースを開始し、12月下旬には遺構図版の作成を終了した。

一方、接合・復元を完了した遺物については5月から実測・拓本を開始した。8月下旬から遺物実測図のトレースを開始し、11月に仮図版を作成、翌年1月下旬には遺物図版の作成を終了した。

写真については9月上旬に遺物の撮影を行い、10月初旬には巻頭カラーに掲載する遺物撮影を小川忠博氏に委託して行った。12月から遺構と遺物の写真図版の作成を開始し、1月下旬に完了した。

10月から原稿の執筆、データ処理、地形図、分布図、表などの各種図版の作成を行い、12月から割付作業を行い、翌1月下旬に完了した。2月に入校し、校正作業を経て3月に報告書を刊行した。

発掘調査・報告書作成の経過

遺 跡 名	期 間	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度
外 東 遺 跡	H 6. 4. 1 ~ H 6. 7. 31	■				
神 田 天 神 後 遺 跡	H 7. 10. 1 ~ H 7. 11. 30		■			
大久保条里A・B区	H 7. 12. 1 ~ H 8. 3. 31		■			
大久保条里C・D区	H 8. 4. 1 ~ H 8. 11. 30			■		
大久保条里E・F区	H 9. 11. 1 ~ H 10. 3. 31				■	
整理・報告書作成	H 10. 4. 1 ~ H 11. 3. 31					■

3.発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)発掘調査

平成6年度

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 栃原 嗣雄
常務理事兼管理部長 加藤 敏昭
理事兼調査部長 小川 良祐

管理部

庶務課長 及川 孝之
主査 市川 有三
主事 長滝 美智子
主事 菊池 久
経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主事 福田 昭美
主事 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一夫
調査第四課長 酒井 清治
主任調査員 西口 正純
調査員 君島 勝秀

平成7年度

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 吉川 國男
常務理事兼管理部長 新井 秀直
理事兼調査部長 小川 良祐

管理部

庶務課長 及川 孝之
主査 市川 有三

主任 長滝 美智子

主事 菊池 久

専門調査員兼経理課長 関野 栄一

主任 江田 和美

主任 福田 昭美

主任 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一夫

調査第四課長 酒井 清治

主査 田中英司

主任調査員 田中正夫

平成8年度

理事長 荒井 桂

副理事長 富田 真也

専務理事 吉川 國男

常務理事兼管理部長 稲葉 文夫

理事兼調査部長 小川 良祐

管理部

庶務課長 依田 透

主査 西沢 信行

主任 長滝 美智子

主事 菊池 久

専門調査員兼経理課長 関野 栄一

主任 江田 和美

主任 福田 昭美

主任 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一夫

調査第三課長 村田 健二

主査 田中英司

主任調査員 伴 瀬 宗一

平成9年度

理事 長	荒井 桂
副理事 長	富田 真也
専務理事	塩野 博
常務理事兼管理部長	稲葉 文夫
理事兼調査部長	梅沢 太久夫

管理部

庶務課 長	依田 透
主 査	西沢 信行
主 任	長滝 美智子
主 任	腰塚 雄二
専門調査員兼経理課長	関野 栄一
主 任	江田 和美
主 任	福田 昭美
主 任	菊池 久

調査部

調査部 副部長	今泉 泰之
調査第三課 長	浅野 晴樹
主任 調査員	伴 瀬宗一
主任 調査員	末木 啓介

(2) 整理・報告書刊行

平成10年度

理事 長	荒井 桂
副理事 長	飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴木 進

管理部

庶務課 長	金子 隆
主 査	田中 裕二
主 任	長滝 美智子
主 任	腰塚 雄二
専門調査員兼経理課長	関野 栄一
主 任	江田 和美
主 任	福田 昭美
主 任	菊池 久

資料部

資料部 長	増田 逸朗
主幹兼資料部副部長	小久保 徹
専門調査員兼資料整理第一課長	坂野 和信
主任 調査員	君島 勝秀

II 遺跡の立地と環境

外東遺跡・神田天神後遺跡

外東遺跡、神田天神後遺跡は、埼玉県南部の浦和市に所在する遺跡で、JR埼京線の南与野駅から西方約3.3kmの位置にある。埼玉県浦和市は、大宮台地南端部に位置を占めており、市内の大部分が大宮台地上に乗る。台地縁辺部には中小河川の浸食による小支谷が発達し、市内西部から南部にかけては荒川低地が広がっている。荒川低地には、旧河川の氾濫によって形成された数多くの自然堤防と広大な後背湿地が存在する。自然堤防上には弥生時代から中・近世にかけて多くの遺跡が分布しており、外東遺跡と神田天神後遺跡もこれらの遺跡の中の一部である。

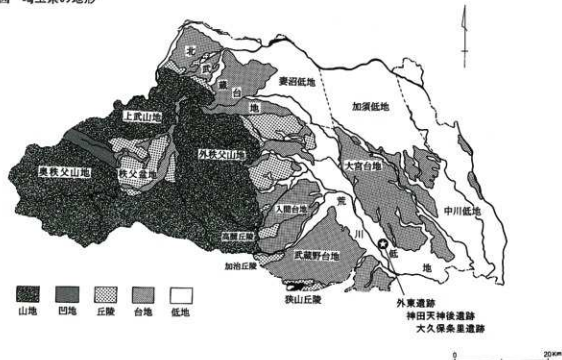
次に、両遺跡が位置する浦和市西部の荒川低地を見ると、現在の鴨川となっている旧入間川の流路にそって、兩岸には細長く微高地が発達している。この微高地は、旧入間川の氾濫によってできた自然堤防であり、旧河川の流路を包み込むようにして、上流は大宮市西部の西遊馬付近から、下流は浦和市南部を経て川口市の北部へと続いている。北東から流れてきた旧

入間川は、浦和市下大久保付近でUターンするように強く折れ曲がる。外東遺跡と神田天神後遺跡は、この蛇行部分の自然堤防上に立地する。両遺跡の東方には旧河川の谷部を望み、対岸には同時代の遺跡である五関中島遺跡が対峙する。

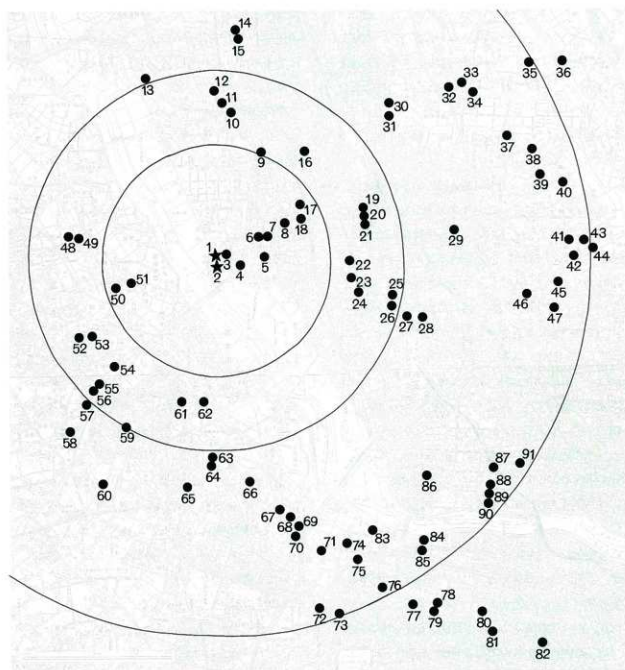
外東遺跡の遺跡範囲は、細長い自然堤防を包み込むように位置しており、北側から西側にかけては後背湿地が広がり、北方400mには大久保条里遺跡が展開する。東側は旧河川低地部となる。遺跡の標高は6.7m、旧河川低地部との比高差は約2mを測る。

神田天神後遺跡は、北部を旧河川低地部に望み、南部から西部にかけては比較的広大な平坦地がひかえている。この平坦地は現在埼玉大学がある下大久保道ヶ谷戸から下大久保新田へと、東に続く自然堤防の延長上に位置する。現在は荒川の堤防に区切られ、水田や荒地が広がっている。このエリアには大久保古墳群を構成する天神山古墳と観音塚古墳、また平成5年に当事業団によって調査された堤根遺跡などの古墳時代前期以降の遺跡がいくつか存在しており、本来は西から

第1図 埼玉県の地形



第2図 外東遺跡・神田天神後遺跡と周辺遺跡



- 1 外東遺跡 2 神田天神後遺跡 3 五箇中島遺跡 4 下大久保新田遺跡 5 本村遺跡 6 大久保領家片町遺跡 7 大久保領家片町遺跡 8 上大久保新田遺跡 9 西浦一号遺跡 10 B-105号遺跡 11 水判土遺跡 12 C-8号遺跡 13 C-111号遺跡 14 下加遺跡 15 下加南遺跡 16 与野東遺跡 17 内道西遺跡 18 岡野坂遺跡 19 中里前原北遺跡 20 中里前原遺跡 21 上太寺遺跡 22 礼ノ辻遺跡 23 矢垂遺跡 24 須黒神社遺跡 25 別所子野上遺跡 26 別所西野台遺跡 27 浦和市別所遺跡 28 白樺本宿遺跡 29 前耕地遺跡 30 B-7号遺跡 31 北袋遺跡 32 A-61号遺跡 33 鎌倉公園遺跡 34 福山遺跡 35 染谷遺跡群 36 上野田西台遺跡 37 北宿遺跡 38 馬場北遺跡 39 松木遺跡 40 芝原遺跡 41 大北遺跡 42 井沼方遺跡 43 西谷遺跡 44 宮前遺跡 45 明花向遺跡 46 善前南遺跡 47 円正寺遺跡 48 伊佐島遺跡 49 上内手遺跡 50 山形遺跡 51 難波田氏館跡 52 打越遺跡 53 水川前遺跡 54 東台遺跡 55 富士見市別所遺跡 56 北通遺跡 57 南通遺跡 58 本村南遺跡 59 西原大塚遺跡 60 新開遺跡 61 田子山遺跡 62 栗崎堂山遺跡 63 谷津遺跡 64 観音堂遺跡 65 泉水山・下ノ原遺跡 66 岡・向山遺跡 67 台の城山遺跡 68 柳戸遺跡 69 上之郷遺跡 70 花ノ木遺跡 71 西ッ木遺跡 72 白子塚上遺跡 73 成増一丁目遺跡 74 年王山遺跡 75 吹上遺跡 76 赤塚氷川神社北方遺跡 77 松月院境内遺跡 78 四葉地区遺跡 79 徳川川川遺跡 80 西台遺跡 81 五段田遺跡 82 前野町遺跡 83 榎堂遺跡 84 早瀬前遺跡 85 徳丸原大橋遺跡 86 根本橋遺跡 87 鏡冶谷・新田口遺跡 88 上戸田本村遺跡 89 南町遺跡 90 南厚遺跡 91 前谷遺跡

続く比較的広い自然堤防だったと考えられる。遺跡の標高は6m、旧河川低地部との比高差は2mを測る。

今回の調査によって、外東遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての周溝と溝が、神田天神後遺跡では弥生時代後期の土壇と古墳時代前期の住居跡が検出された。ここでは、両遺跡に関連する時代として、弥生時代から古墳時代前期にかけての周辺の主な遺跡について概観したい。

第2図は周辺の主な遺跡の分布図である。最初に、最も近い範囲を見てみると、外東・神田天神後遺跡(1・2)から半径3km圏内には、北部は現在の治水橋の手前、南部は秋ヶ瀬橋、西部は新河岸川上流の川筋まで含まれる。この圏内に入る遺跡としては、浦和市西部の荒川低地内の遺跡群、現在の荒川対岸では新河岸川上流地域の低地遺跡が全て入る。浦和市西部の荒川低地内の遺跡群は、五関中島遺跡(3)、下大久保新田遺跡(4)、本村遺跡(5)、大久保領家遺跡(6)、大久保領家片町遺跡(7)、上大久保新田遺跡(8)などの遺跡群で、旧入間川沿いの自然堤防上に連続と分布している。この地域に最初に遺跡が現れるのは、弥生時代中期の本村遺跡である。昭和42年の調査では、住居跡から須和田式土器が出土している。同遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓が5基検出され、古墳時代前期以降も住居跡が多数検出されていることから、弥生時代から古墳時代、中世を通して、この地域の中心的な活動の舞台となった遺跡として注目される。

旧河川沿いの自然堤防上に本格的に遺跡が現れるのは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期であり、遅くともこの頃には、旧入間川流路は安定した河川としてこの地域を流れていた可能性があり、これらの遺跡群と東京湾沿岸地域、大宮台地北部や埼玉県北部地域とをつなぐ交通の役割をになっていたものと考えられる。弥生時代後期には、上大久保新田遺跡(8)、大久保領家遺跡(6)などで住居跡が、大久保領家片町遺跡(7)で方形周溝墓が検出されている。古墳時代前期には、五関中島遺跡(3)、大久保領家片町遺跡(7)、上大久保新田遺跡(8)で住居跡が、本村遺跡(5)、大

久保領家片町遺跡(7)、大久保領家遺跡(6)で方形周溝墓が検出されている。堤根遺跡では、幅9mの古墳時代前期の溝が検出された。これらの遺跡は、位置的に外東・神田天神後両遺跡に最も関連性の強い遺跡群である。

新河岸川上流地域の低地遺跡では、富士見市の山形遺跡(50)、難波田氏館跡(51)は古墳時代前期の遺跡で、現在の荒川を挟んだ西側の地域では、外東・神田天神後両遺跡から最も近い距離にある遺跡群である。

次に周囲5km圏内には、旧入間川沿いの大宮市域の遺跡群をはじめ、大宮台地西縁部の与野支台および鴻沼低地沿いの遺跡群、現荒川の対岸方面では、新河岸川上流地域の武蔵野台地縁辺部の遺跡および柳郷川下流域の遺跡群が含まれる。旧入間川沿いの遺跡では、西浦一号遺跡(9)、大宮市域のB-105遺跡(10)、水判土遺跡(11)などが、古墳時代前期の遺跡として挙げられる。さらに鴨川を溯ると下加・下加南両遺跡(14・15)がある。下加南遺跡では、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭にかけての住居跡が7軒検出されている。

与野支台および鴻沼低地沿いの遺跡群では、内道西遺跡(17)、諏訪坂遺跡(18)でそれぞれ弥生時代中期の宮ノ台式期の住居跡が検出された。弥生時代後期では、与野東遺跡(16)、札ノ辻遺跡(22)、矢垂遺跡(23)、須黒神社遺跡(24)が挙げられる。札ノ辻遺跡では住居跡50軒と方形周溝墓3基、須黒神社遺跡では住居跡46軒が検出されており、いずれも大規模遺跡といえる。中里前原北(19)・中里前原(20)・上太寺(21)の3遺跡は、鴻沼低地を西に望んで立地する台地上の遺跡で、途切れなく近接している。これらの遺跡では、住居跡、方形周溝墓、環濠が検出されており、弥生時代後期に営まれた墓域を含むひとつの集落跡であると考えられる。これらの遺跡からさらに南に下ると、弥生時代後期の別所野上遺跡(25)、別所野台遺跡(26)、別所遺跡(27)、白幡本宿遺跡(28)が分布する。白幡本宿遺跡では、弥生時代後期の住居跡12軒が検出されている。

新河岸川上流域では、弥生時代後期の環濠集落跡といわれる伊佐島遺跡(48)、古墳時代前期の上内手遺跡(49)が低地遺跡として位置する。上内手遺跡では古墳時代前期の住居跡10軒が検出された。

武蔵野台地上には、富士見市の打越遺跡(52)、永川前遺跡(53)が立地する。柳瀬川下流域では、富士見市の北通遺跡(56)、東台遺跡(54)をはじめ、弥生時代後期の遺跡が数多く分布する。北通遺跡では、これまでにこの時期の住居跡312軒が検出されている。志木市では田子山遺跡(61)がこの圏内に入る。

さらに、外東・神田天神後両遺跡から周囲10km圏内を見てみると、浦和市東部、大宮台地東部の見沼低地沿いに分布する遺跡群、戸田市域では荒川低地内の遺跡群、和光市域、東京都板橋区域では、武蔵野台地縁辺部の新河岸川中流域に分布する遺跡群、柳瀬川、黒目川流域の遺跡群などが入ってくる。

まず、大宮台地東部から見てみると、この地域には弥生時代中期から後期にかけての遺跡が数多く分布する。弥生時代中期の遺跡では、上野田西台遺跡(36)、北宿遺跡(37)、松木遺跡(39)、大北遺跡(41)、西谷遺跡(43)、明花向遺跡(45)、円正寺遺跡(47)が知られ、周辺の他地域と比較して多くの遺跡が分布する。上野田西台遺跡では、宮ノ台式期の住居跡が多数検出された他、明花向遺跡では住居跡7軒と方形周溝墓3基が検出された。大谷遺跡では住居跡5軒が検出された。弥生時代後期の主な遺跡では、北袋遺跡(31)、染谷遺跡群(35)などが大宮市域の遺跡として挙げられる。北袋遺跡では、弥生時代後期の住居跡30軒が検出された。浦和市域では、主な遺跡だけでも上野田西台遺跡(36)、北宿遺跡(37)、馬場北遺跡(38)、芝原遺跡(40)、井沼方遺跡(42)、宮前遺跡(44)、善前南遺跡(46)などが挙げられる。馬場北遺跡は、これまでに弥生時代後期の住居跡121軒が検出された環濠集落跡である。芝原遺跡では住居跡7軒、宮前遺跡では住居跡21軒が検出されている。井沼方遺跡では、住居跡15軒と方形周溝墓6基が検出されている。

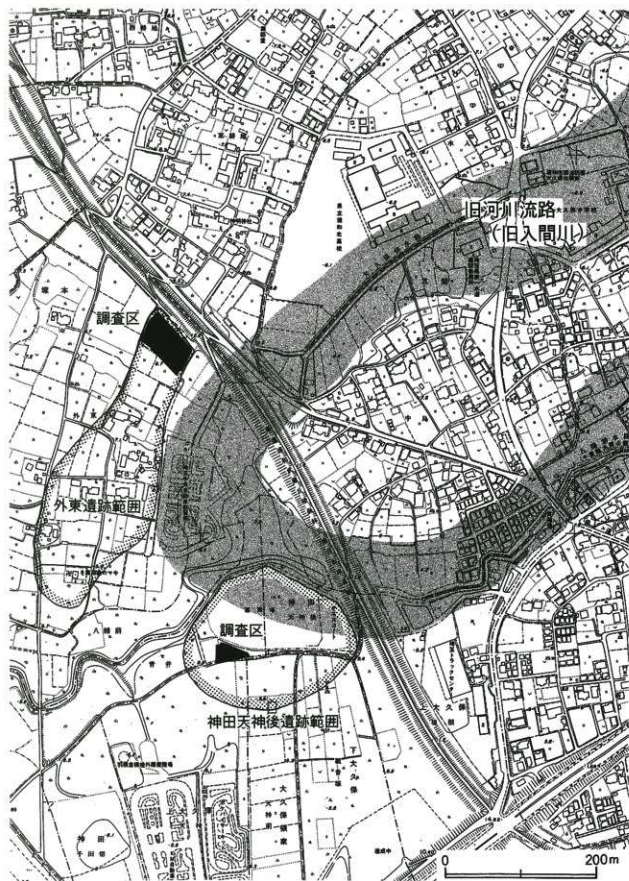
次に、戸田市域の荒川低地内では、弥生時代後期終

末から古墳時代前期にかけての遺跡が知られている。鍛冶谷・新田口遺跡(87)をはじめ、根本橋遺跡(86)、上戸田本村遺跡(88)、南町遺跡(89)、南原遺跡(90)、前谷遺跡(91)の6遺跡がこれまでに調査されている。いずれも自然堤防上に立地する遺跡である。鍛冶谷・新田口遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡と方形周溝墓が多数、著しく重複した状態で検出されている。これまでの調査で検出された主な遺構は、住居跡39軒、方形周溝墓104基を数える。外東遺跡では、今回の調査で検出された周溝が、一部鍛冶谷・新田口遺跡の方形周溝墓の形態と類似する。検出状態も重複が著しいことが、共通する。時間的にも同時期であり、両遺跡の共通性が注目される。南原遺跡では、これまでの調査で古墳時代前期の住居跡31軒、方形周溝墓9基が検出されている。さらに荒川対岸にも榎堂遺跡(83)、早瀬前遺跡(84)、徳丸原大橋遺跡(85)が同じ時期の低地遺跡として挙げられる。

次に、武蔵野台地縁辺部の新河岸川中流域、黒目川、柳瀬川流域には、弥生時代以降、多くの遺跡が分布する。弥生時代中期の遺跡では、板橋区四葉地区遺跡(78)、赤塚氷川神社北方遺跡(76)、和光市午王山遺跡(74)、上之郷遺跡(69)、朝霞市台の城山遺跡(67)、柳瀬川流域では富士見市南通遺跡(57)、岡・向山遺跡(66)が挙げられる。いずれも宮ノ台期の住居跡が検出されている。弥生時代後期以降になると、小支谷に囲まれた各台地上には高い密度で遺跡が分布するようになり、東京都板橋区では遺跡の密集度が最も高くなる。黒目川、柳瀬川流域でも同様に遺跡が増加する。なかでも富士見市南通遺跡(57)では、弥生時代後期の住居跡312軒が調査されており、大規模遺跡として注目される。

以上、外東・神田天神後両遺跡を中心として、半径10km圏内までの周辺の遺跡を弥生時代から古墳時代前期までに限って概観した。まとめると、弥生時代前期宮ノ台式期の遺跡は、大宮台地縁辺部と武蔵野台地縁辺部の各河川流域、各地域ごとに住居跡数軒という小規模遺跡の分布が確認されること。弥生時代後期

第3図 遺跡位置図 (外東遺跡・神田天神後遺跡)



になると遺跡が急激に増加し、各流域、各地域ごとに大規模遺跡が確認される。こうした中で、広大な荒川低地に遺跡が安定的に現れるのは、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭にかけての時期であり、これまでのところ、浦和市西部の旧入間川流域、新河岸川上流域、戸田から東京都板橋区にかけての低地部の3つの地域で分布が確認されている。今後、荒川低地内での調査事例が増えていけば、この時代の低地への進出の実態により近づくことができるだろう。

大久保条里遺跡

大久保条里遺跡は外東遺跡の北方約400mに位置する。現在の荒川左岸の荒川低地内に広がる後背湿地に立地し、東方を旧入間川の流路に沿って発達した自然堤防に囲まれる。遺跡の範囲は約210haに及ぶ。標高5.5mを測り、東側を囲む自然堤防より2～3m低くなる。

ここでは、大久保条里遺跡に関わるこれまでの調査研究について概観する。

大久保条里遺跡の存在については、昭和2年に刊行された「埼玉縣史」第2巻で紹介されたのが最初である。ここでは現在の大宮市西部の島根・三条町に条里の存在を認めている。その後、三友国五郎氏の調査や柳田敏司・清水彰夫両氏の調査によって、この条里遺跡が浦和市大久保にまで続くことが指摘された。

昭和62年に刊行された「荒川」荒川総合調査報告書2では、荒川下流域の条里遺跡として取り上げられている。ここでは現地調査と古地図、昭和22年のGHQ撮影の航空写真などから、遺跡範囲の把握、条里の復元、荒川の流路や地形の関係などについて調査を行っている。これによれば、大久保条里は、明治18年に製作された迅速図「大井町」に描かれた道路や水路の状況から、その範囲を当時の三条町村、嶋根村を中心として、その北辺は西遊馬村、南辺は宿村、塚本村、西辺は荒川の旧流路近くまで、東辺は嶋川右岸の自然堤防上までとしている。その広さは南北が最長で6km、東西が最長で4.3km、面積にして1,437haに及ぶものとされている。

以上の調査研究の他にも、地理学、文献史学などの方面から、現況の地表面の観察や地図からの復元に基づく論考がいくつかなされている。

一方、昭和59年から63年にかけて浦和市遺跡調査会によって4次にわたる発掘調査が行われ、大久保条里に初めて科学的な調査の手が及んだ。調査地点は浦和市大字宿字二重川を中心として、現況測量をはじめ水田耕作面と条里制区画に関係する畦畔・水路などの遺構を検出するための面的調査、土壌採取による自然科学分析が行われた。

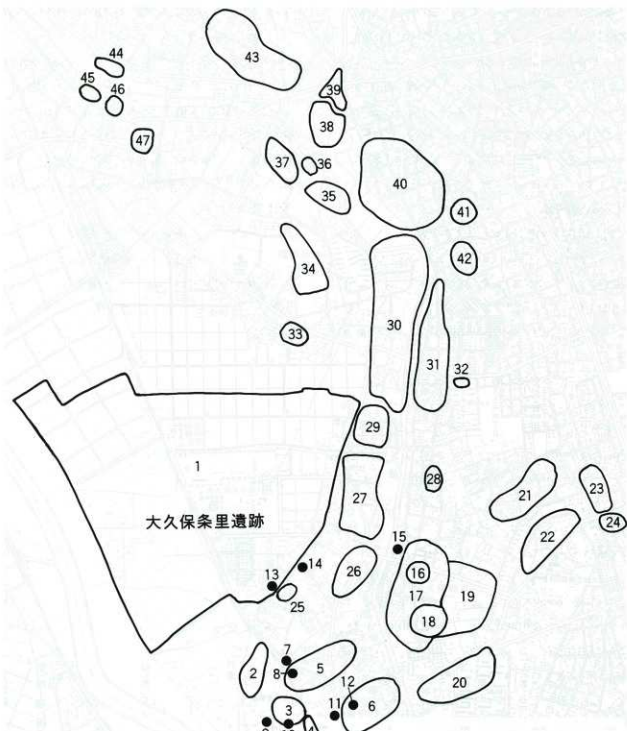
第1次調査では、トレンチによる試掘調査が行われた。その結果、第II層と第III層の境界線に起伏が観察され、現況の畦畔と一致することが確認された。これらの土層は、テフラ分析と放射性炭素による年代測定の結果から、条里制に関係する時代の土層であると考えられ、土層の境界線の起伏は条里制時代の畦畔・水路である可能性があると推定した。時代的には「弥生時代以降平安時代までの間という時代の幅が示された。」としている。同時に行われたプラント・オーバーホール分析、花粉分析、珪藻分析などにより、第II層および第III層における水田耕作の可能性について指摘している。また、現況測量と地籍図による地割の復元では、長地割の条里区画を推定している。

第2次調査では、第1次調査の成果に基づいて条里遺構を検出することを目的に、1,000mの調査区を設定し、面的調査を行っている。調査の結果、東西方向に1条、南北方向に2条、計3条の畦畔が検出された。

(第6図) これらの畦畔は、幅約2m、高さ30cmでほぼ一定の高さを保っている。遺構検出面は第1次調査で境界線の起伏が観察された第III層に相当する黒色粘土層の上面であり、テフラ分析の結果から、水田耕作された時期を11世紀末～12世紀初頭と推定している。また、検出された畦畔の位置が、現況図および地籍図の位置とほぼ一致していることも確認された。

第3次調査では、明治時代の地籍図に見られる用水路を検出したほか、江戸時代の遺構と考えられる土壌、溜池状遺構、杭列を持つ遺構などが検出された。一部

第4図 大久保条里遺跡と周辺遺跡



- 1 大久保条里遺跡 2 外東遺跡 3 神田天神後遺跡 4 堤根遺跡 5 五間中島遺跡 6 下大久保新田遺跡 7 大久保三号墳 8 堤防下古墳 9 天神山古墳 10 観音塚古墳 11 西金剛塚古墳 12 金剛塚古墳 13 神明寺山古墳 14 塚山古墳 15 神田古墳 16 大泉院境内寺院跡 17 大久保領家遺跡 18 道場寺院跡 19 大久保領家片町遺跡 20 本村遺跡 21 神田作田遺跡 22 上大久保新田遺跡 23 内道西遺跡 24 諏訪坂遺跡 25 塚本東耕地遺跡 26 古貝戸遺跡 27 宿宮前遺跡 28 宮田墓地遺跡 29 在家遺跡 30 根切遺跡 31 白銀古墳群・白銀宮願遺跡 32 八王子殿ノ前遺跡 33 C-2号遺跡 34 C-112号遺跡 35 林光寺遺跡 36 C-5号遺跡 37 C-4号遺跡 38 日-105号遺跡 39 水利土塚の内遺跡 40 側ヶ谷戸古墳群 41 山王西一号遺跡 42 西濠一号遺跡 43 樋水古墳群・水利土遺跡 44 馬宮遺跡群 45 C-56号遺跡 46 C-55号遺跡 47 C-54号遺跡

前回調査の耕作面から、さらに下層まで落として調査した地点では、明確な耕作面は検出されなかったが泥炭層の一部と畦畔状のものか検出された。このことから、前回調査で検出された11世紀末～12世紀初頭の耕作面の下にも耕作面があった可能性を指摘している。

第4次調査では、南北方向に走る太い溝と細い溝によって区画された長方形を呈すると見られる地割が検出された。(第6図) 検出面は第2・3次調査の遺構検出面と同時期の面と考えられる黒色泥炭層である。南北方向の地割りによる耕作面は5列検出され、この区画は、南北に走る太い溝によって大きく分けられ、太い溝に沿って細い溝が並行して走り、これが東西方向に曲がって耕作面の区画を行っている。これらの状況から、土地の地割が畦畔ではなく、溝によって行われていることが明らかになった。これらの遺構と検出面の時期については、第3次調査で行われたテフラ分析と放射性炭素による年代測定の結果を援用しながら、遺構検出面の土層がAD650～AD1108年に堆積したものと推定し、「今回検出された面は、層の堆積に年代幅があるので断定的なことは言えないが、条里制が施行され始めた頃の耕作面である可能性も考えられる。」としている。また、耕作面の区画が現況測量の土地区画とはほぼ一致していることも確認され、当時の地割がその後も引き継がれ、最近まで残っているということが明らかになった点も注目される。

以上が大久保条里遺跡について、これまで行われてきた調査研究の概要である。

次に、大久保条里遺跡の周辺地域における主な遺跡について、弥生時代以降の時代順に概観する。(第4図) 大久保条里遺跡の北、東、南の三方を取り囲むように、鴨川沿いに伸びる自然堤防には、弥生時代以降、数多くの遺跡が立地している。現在の大宮市西遊馬から佐知川、水判土を経て、現在の鴨川の流れるに通じる細長い低地は、旧入間川の流路であり、現在の浦和市下大久保付近で強く折れ曲がって、上大久保地区へと流れを変えて行く。大久保条里遺跡を取り囲む自然堤防は、この旧入間川の流れによって形成されたものである。

この自然堤防上に最初に遺跡が現れるのは、弥生時代中期の本村遺跡(20)である。昭和42年の調査では、住居跡から須和式土器が出土している。

大宮台地の与野支台では、内道西遺跡(23)、諏訪坂遺跡(24)で、弥生時代前期の宮ノ台式期の住居跡が検出されている。自然堤防上では、宮ノ台式期の遺跡はいまのところ見られず、本格的に遺跡が現れ始めるのは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期である。この時期の遺跡は、浦和市の大久保地区に多く分布する他、鴨川との合流部分にも水判土遺跡をはじめ、数遺跡が分布する。(38・42・43) 東方の新河岸川上流域でも弥生時代後期以降、伊佐島遺跡、上内手遺跡をはじめ数遺跡が低地部に現れる。大久保地区に分布する主な遺跡では、今回調査した外東遺跡(2)、神田天神後遺跡(3)の他、下大久保新田遺跡(6)、本村遺跡(20)、大久保領家片町遺跡(19)、上大久保新田遺跡(22)などがある。これらの遺跡の中には方形周溝墓が検出され、墓をもった集落跡が存在する。このことから遅くとも弥生時代後期には、自然堤防上で安定的に集落が営める環境になっていたと考えられる。と同時に、これらの遺跡の存在は、遺跡周辺の低地部において水田耕作が開始されたことを示している。今後、大久保条里以前の水田開発の実態を解明する上で、この時期の水田遺構の検出が期待される。堤根遺跡では、古墳時代前期の幅9mの溝と、分岐する溝に付属して、堰跡と思われる遺構が検出されており、注目される。旧入間川沿いの自然堤防からさらに外周に当たる地域を見てみると、大宮台地の与野支台では先述した内道西遺跡(23)、諏訪坂遺跡(24)の他、札の辻遺跡では、弥生時代後期以降の住居跡が多数検出されている。鴨川流域の大宮台地上では、古墳時代前期に下加遺跡、下加南遺跡が分布する。

続く和泉式期には、いまのところ自然堤防上において明確な集落跡が確認されていないが、遺跡は確実に存在しており、今後の調査事例の増加が期待される。白鷲古墳群(31)の一つである白鷲塚山古墳の周溝から5世紀後半代の埴輪が出土している。八王子殿ノ前

第5図 遺跡位置図（大久保条里遺跡）



遺跡(32)、本村遺跡(20)、古貝戸遺跡(26)では古式須恵器が出土している。与野支台では札ノ辻遺跡で、和泉式期の住居跡が検出された。

古墳時代後期には、再び多くの遺跡が自然堤防上に分布する。集落跡を見てみると、本村遺跡(20)では、これまでの調査で総数2軒の住居跡が検出されたのをはじめ、B-105号遺跡(38)、水判土堀の内遺跡(39)、根切遺跡(30)、白銀宮腰遺跡(31)、宿宮前遺跡(27)、古貝戸遺跡(26)、塚本東耕地遺跡(25)、堤根遺跡(4)、上大久保新田遺跡(22)、下大久保新田遺跡(6)、道場寺院跡(18)などで住居跡が検出されている。今回調査した神田天神後遺跡(3)でも、この時期の住居跡が1軒検出された。

古墳では、植水古墳群(43)、側ヶ谷戸古墳群(40)、白銀古墳群(31)、大久保古墳群が(7-15)、自然堤防上に分布する。築造時期は、植水古墳群が、5世紀末から7世紀代、側ヶ谷戸古墳群が6世紀後半から7世紀代、白銀古墳群が5世紀後半から7世紀代、大久保古墳群が7世紀代と考えられている。これらの古墳群は、上記の自然堤防上の集落跡と密接な関係を持って形成されたと考えられる。これらの遺跡を残した集団の生産基盤については、周囲に広がる低地部に於いて、大きな土地開発の進展があったに違なく、その意味からも大久保条里遺跡の存在が注目される。なお、今回調査した外東遺跡(2)でも、円墳の周溝が検出され、大久保古墳群の一部を構成するものと考えられる。

奈良・平安時代には、白銀宮腰遺跡(31)、宿宮前遺跡(27)、大久保領家片町遺跡(19)、本村遺跡(20)などで住居跡が検出されたのをはじめ、今回調査した外東遺跡(2)では、奈良・平安時代の住居跡12軒、神田天神後遺跡(3)でも平安時代の住居跡1軒と掘立柱建物跡1棟が検出された。大宮市域では水判土堀の内遺跡(39)、根切遺跡(30)、馬宮遺跡群(44)、C-112号遺跡(34)で住居跡が検出された。この他、C-54

号遺跡、C-55号遺跡、C-56号遺跡、C-2号遺跡、C-4号遺跡、C-5号遺跡、林光寺遺跡などが、この時期の遺跡として挙げられる。(33-35-37-45-47)

このように、奈良・平安時代には、集落が自然堤防上の全体に拡散して営まれるようになる。これらの遺跡のすべてが同時存在していたわけではないにしても、当時営まれていたと考えられる大久保条里に直接的に結びついた遺跡であることは確実に考えられる。

また、浦和市大久保地区では、瓦を出土する遺跡が多いことが知られている。大久保領家片町遺跡(19)で奈良時代の平瓦が一括出土したのをはじめ、大久保領家遺跡(17)、道場寺院跡(18)で蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦が出土している。この他にも自然堤防上で、この時期の瓦を出土した遺跡が多い。宿宮前遺跡(27)では布目瓦の埋没層の存在が知られ、平安初期の寺院跡または都衛と考えられ、大久保地区に足立郡家が営まれた可能性が指摘されている。(青木1971)

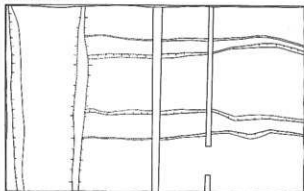
以上、大久保条里遺跡に関わる周辺の主な遺跡について概観した。

大久保条里遺跡の調査は、従来、古地図や古い地名の読み取り、現況調査など、主に現地表面の観察によって、条里遺構の存在が論及され、当地における条里制の復元が試みられてきた。それらは、他地域、他地方での条里遺跡の調査成果の蓄積などを踏まえながら、地理学、考古学、文献史学など、様々な視点からの調査研究がなされてきた。その後、発掘調査によって得られた考古学的所見と、自然科学分析の結果とを総合しながら、当地における条里遺構の存在を明らかにしようとしてきた。

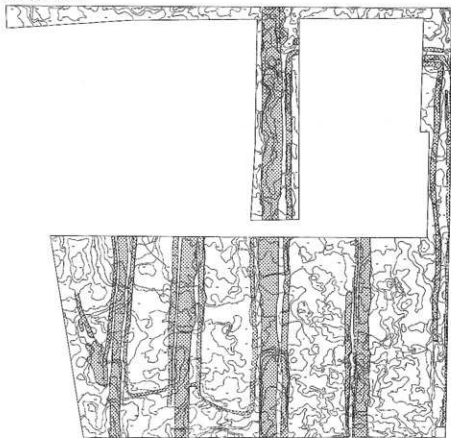
今後、低地部の水田遺構の調査の進展によって、荒川低地における水田耕作の期的変遷を跡付けて行く中で、この地域における条里制の実態にも迫って行くことができるものと思われる。

第6図 検出された主な遺構（大久保条里遺跡）

清和市遺跡調査会第2次調査



清和市遺跡調査会第4次調査



0 20m 1/500

Ⅲ 外東遺跡

1. 遺跡の概要

外東遺跡は荒川低地内の自然堤防上に立地する。浦和市五関付近では、現在の鴨川に沿って北東から南西方向に向かって自然堤防が細長く伸びている。この自然堤防上の最も南西部が外東遺跡の遺跡範囲に覆われている。遺跡の標高は6.7m、旧河川となる南側の低地との比高差は約2mを測る。今回の調査区は、この遺跡範囲の北部に位置し、現在の荒川堤防に沿って、縦約75m、横約38mの長方形に設定された。調査区内は平坦であるが、東部から南東部にかけては旧河川の流路である低地に向かって傾斜している。

第8図は、調査区南東部の傾斜面に埋没した、谷部の土層堆積を示すものである。調査区内の平坦面では第6層の上で遺構が確認されており、以下の層が地山となる。第3層下部から第5層までが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物包含層である。調査区内の平坦面で検出された周溝や、土壌の覆土はこの土層に共通するものと思われる。また、古墳跡の周溝内に堆積した黒褐色土は、第3層に近似する。古墳研究のテフラ分析によれば、第2層上位から第3層中位にかけて採取した土壌から、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳流川テフラ(Hr-FA)に由来する白色軽石が検出された。また、第2層下部付近を降灰層準として、西暦1108年浅間火山から噴出した浅間Bテフラに由来する軽石が検出された。

以上の結果を総合すると、第5層から第3層下部までが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての堆積層、第3層中位が古墳時代後期の堆積層、第2層が平安時代の12世紀初頭以降の堆積層と考えられる。

また、第2層上位の段階では、傾斜面がほぼ埋まった状態が観察されることから、低地部に向かって堆積作用が進んだのは、平安時代の末期以降であることを示している。

調査区内の平坦面では、表土が調査区西部で約60cmと厚く堆積しており、東部では30～40cmと薄くなる。

第1層の表土下は第2～5層は遺存せず、第6層の地山が現れる。これは現在の荒川堤防が築かれる際に、周辺で大規模な土取りが行われており、その影響を受けた可能性もあるが、詳細は不明である。

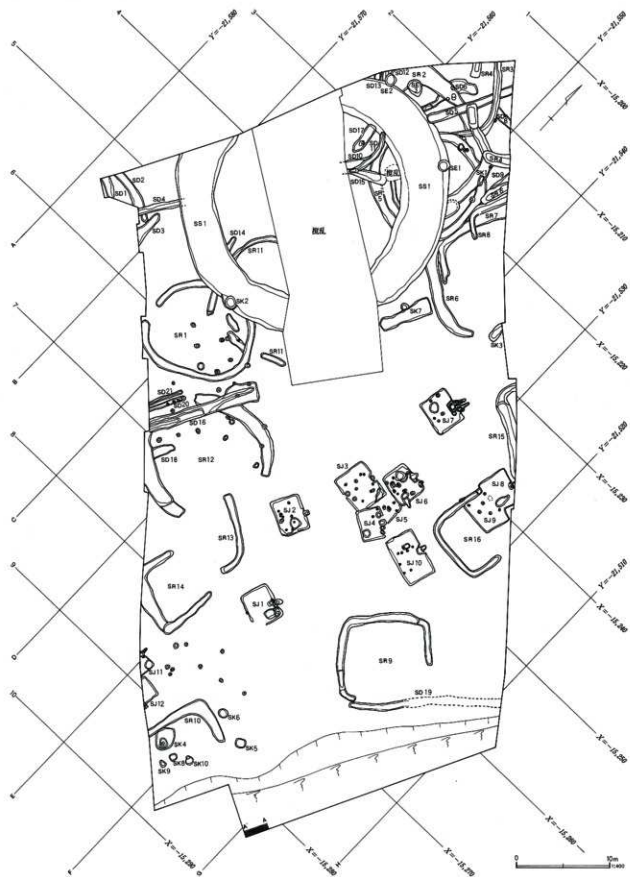
今回の調査で検出された遺構は、住居跡12軒、古墳跡1基、土壌10基、井戸跡3基、周溝16条、溝21条、ピット29基である。時代別には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構が、周溝16条、溝14条、土壌10基、ピット29基である。次に古墳時代後期の古墳跡1基、奈良・平安時代の住居跡12軒、近・現代の溝7条と井戸跡3基である。

住居跡は、調査区中央部のやや東よりから南東部にかけて、帯状に分布する。いずれも覆土の残りが残く、出土遺物は少ない。壁溝の巡るものが多く、支柱穴が明確なものも少ない。他の住居跡との重複が多いSJ5を除く全ての住居跡で、カマドが検出された。出土遺物と全体の形状から判断して、全ての住居跡が奈良・平安時代のもので推定される。このうちSJ2・7～9・12は奈良時代、SJ4・6・11は平安時代であると推定される。SJ6・7は、カマドが2基検出され、作り替えが行われたものと思われる。SJ10の床面からは炉跡が検出された。

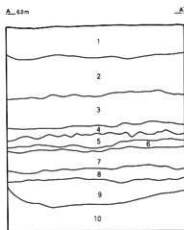
古墳跡は、調査区北西部から検出された。墳丘部は、調査以前から削平されており、表土を除去した時点で円形に巡る周溝が検出された。周溝の囲む中央部から周溝南東部にかけて、擾乱されている。周溝の形状から判断して、円墳だったものと考えられる。周溝の外径は29m、内径は20mを測る。周溝の覆土中から古墳に関連すると思われる土師器の壺形土器が1個体、須恵器の大甕の口縁から頸部にかけての破片、土師器環などが出土した。

土壌は10基検出された。そのうち6基が、調査区南東部のE-9、F-8・9グリッドから、ある程度のまとまりをもって検出された。各遺構の時期について

第7図 外東遺跡全体図



第8図 外東遺跡基本土層



基本土層

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 1 表土 | |
| 2 暗赤褐色土(SY83/4) | 白色微粒子を含む、粘性なく堅固。 |
| 3 黒褐色土(SY52/1) | 微細粒子を多く含む、中粘性あり緻密。 |
| 4 黒色土(SY81,7/1) | 黄褐色粒子を少量含む、中粘性あり緻密。 |
| 5 赤褐色土(SY86/4) | 黒褐色土をまばらに含む、中粘性あり緻密。 |
| 6 黄褐色土(SY87/8) | 灰褐色土を少量含む、粘性あり緻密。 |
| 7 褐色土(SY86/8) | 微細粒子を含む、粘性あり緻密。 |
| 8 黄褐色土(SY86/8) | 微細粒子を含む、粘性あり緻密。 |
| 9 赤褐色土(SY87/4) | 微細粒子を含む、粘性あり緻密。 |
| 10 青色シルト | |

は、出土遺物からSK3・4・7は古墳時代前期、SK8は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構であると推定される。他の土層については、出土遺物からは明確にできないが、覆土が周溝に近似した暗褐色土であることから、概ね弥生時代後期から古墳時代前期の範中に入るものと推定される。調査区南部に分布する土層の覆土中からは、炭化物和焼土粒子が大量に含むのが見られることから、住居の痕跡だった可能性もある。

溝状の遺構については、溝の巡る形状または伸びる方向が一定の区域を囲むものは全て「周溝」と呼称し、それ以外は全て溝とした。周溝は、調査区中央部を除くほぼ全域で検出され、全部で16基を数えた。ほとんど全てのもが、出土遺物から判断して弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構であると推定される。調査区北西部に位置するものは、密集して互いに激しく重複しており、調査区外に及んでいて全容を把握できないものが多い。SR4は周溝が途切れて陸橋状になるもので、溝の中に長方形の土層を伴う。土層内からは、弥生時代後期末または古墳時代前期初頭の土器が一括して出土した。SR3では1ヶ所から3個体分の土器がまとめて出土した。

調査区東部から南部にかけて分布する周溝は、周溝同志の重複がほとんどなく単独で位置しており、全体の形状を把握できるものが多い。それらの溝が巡る形

状は、J字形、L字形、コの字形、不整形円形、括弧状など多様である。溝が途切れずに、方形に巡る周溝はまったく見られない。周溝に伴う土層やピットは検出されなかった。これらの周溝のうち、方形周溝墓の可能性のある遺構は、SR9・14・16であるが、主体部がまったく検出されていないため判断できない。

溝は21条検出された。このうちSD1・4・5・16・19-21は、覆土が表土に近似すること、出土遺物から判断して近・現代の溝であると推定される。その他の溝は、ほとんどが他の遺構と重複したり、調査区外におよんでいて全容を把握できないが、周溝の一部である可能性もある。それらの溝は、覆土が周溝に近似すること出土遺物から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構であると推定される。互いに重複するSD10・11・15からは、多くの土器が出土した。

単独のピットは全部で29基検出された。円形または楕円形のピットで、調査区南部から南東部にかけて分布する。調査区南部ではSR1・12に重なるように分布するが、周溝の内側で規則的に配列するなどの位置的な関係は認められない。出土遺物から古墳時代前期のものが1基、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものが2基検出された。その他のピットは、出土遺物からは明確にできないが、覆土が弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構である周溝に近似することから、概ねこの時代の遺構であると考えられる。

2. 弥生時代後期・古墳時代前期

(1) 周溝・溝

第1号周溝 (第9・10図)

B-5・6、C-5・6グリッドに位置する。北部を古墳跡であるSS1に切られる。また、SR11と切り合うが、新旧関係は不明である。

今回の調査の中で、周溝の全体を把握することのできる数少ない遺構である。周溝の廻る形状は、楕円形を呈する。西部では、約2mの間隔を持って周溝が途切れ、周溝の囲む内部と外部とを連絡する陸橋状になる。陸橋を形作る周溝の両端部は、ややずれる形で相対しており、左右対称にはならない。また、周溝の他の部分も北西部が緩やかにカーブしてのびるのに対して、北東部と南東部は直線的にのびるなど、楕円形の長軸に対して左右対称にはならず、形状が一定していない。

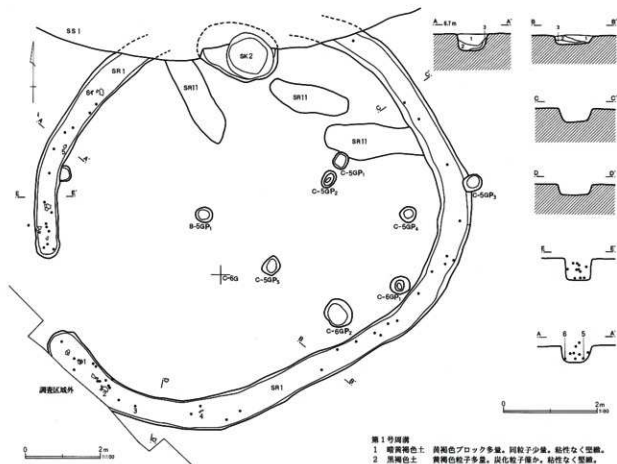
第9図 第1号周溝

ない。

溝の底面はほぼ平坦で、明確な段差はないが、陸橋状に途切れる周溝の北側端部では、底面がやや窪み状に落ち込む。溝の壁はやや開くか垂直ぎみに立ち上がり、断面形は箱形または逆台形になる。

周溝が囲む楕円形の外側は、長軸約12m、短軸10.2mとなる。溝の幅は0.6-0.8m、深さは20-35cmで周溝の途切れた北側端部が45cmと最も深くなる。覆土は黄褐色土を多量に含む暗褐色土である。

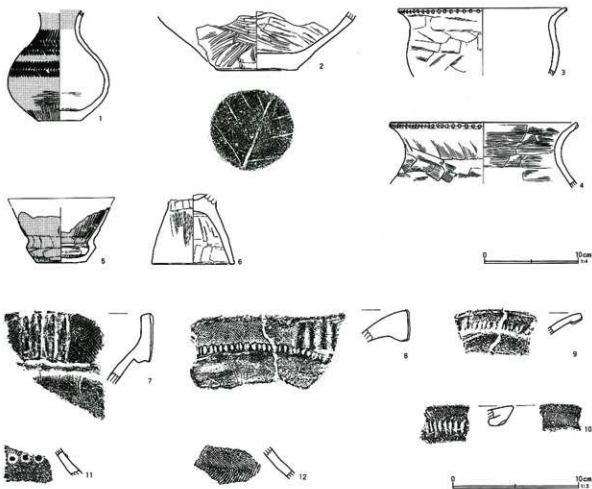
周溝内の出土遺物は、周溝の全体でまばらに分布するが、周溝が途切れる両端部からは、やや多めに出土した。周溝が囲む内部からは、SK2とビット8基が検出されたが、周溝との位置的關係に規則性などは読み取れず、いずれも周溝とは無関係であるものと考えられる。



第1号周溝

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロック多量、同粒土少量、粘性なく堅緻。
- 2 暗褐色土 黄褐色粒土多量、炭化粒子僅か、粘性なく堅緻。
- 3 黄褐色土 黄褐色土主体、黄褐色土少量、やや粘性あり、堅緻。

第10図 第1号溝出土遺物



第1号溝出土遺物観察表 (第10図)

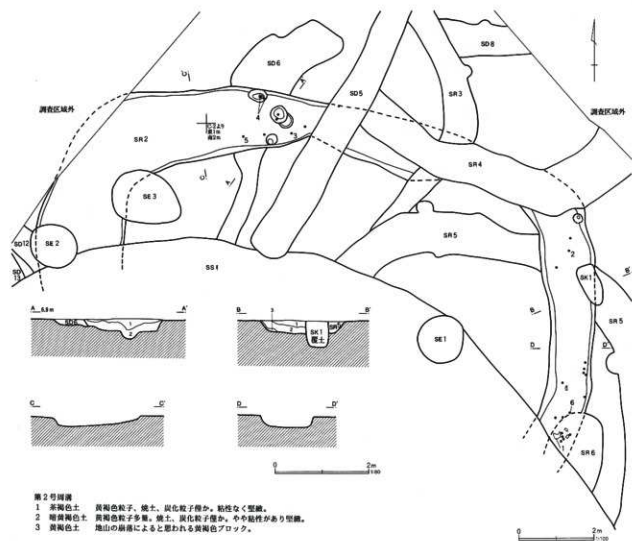
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	小型壺			4.6	W褐	明赤褐	B	70	
2	壺			8.1	W褐	明褐	A	50	
3	甕	(18.0)			W	にぶい橙	B	25	
4	台付甕	(20.1)			W褐	赤褐	A	20	
5	埴	(11.3)			R雲	黄橙	A	80	
6	台付甕				W褐	明赤褐	A	100	
7	壺				褐	橙	A		口縁部 赤彩(外面・口唇部)
8	壺				褐	橙	A		口縁部
9	壺				W	灰黄褐	B		口縁部 赤彩(頸部・内面)
10	壺				W	橙	A		口縁部
11	壺				褐	灰褐	B		頸部
12	壺				W	褐灰	A		頸部

出土土器 (第10図)

1は口縁部を欠損する小型壺である。肩部と胴部に2帯の羽状縄文帯を配する。肩部文様帯は4段の単節縄文に2個1組のボタン状貼付文を5ヶ所に巡らせる。胴部文様帯は2段の単節縄文となっており、両文様帯ともに上下は区画されない。頸部内外面および胴

部外面の無文部は赤彩される。2は大型の壺の底部破片で、外面はよく磨かれ、底部には木葉痕がつく。5は埴で、内外面はハケメ後、篋磨きが施される。7~10は壺の口縁部破片である。7は幅広の複合口縁に羽状縄文を配し、棒状浮文を4本貼り付ける。棒状浮文は貼り付け後、工具で押さえたような痕があり、あまり

第11図 第2号周溝



盛り上がりがない。口唇部にも縄文が施文される。8は口縁部に羽状縄文、太い棒状浮文が4本貼り付く。内面は無文でよく磨かれる。9は口縁部に縄文施文後、下端にキザミ目、縦に突起状の貼付文がつく。10は内面に羽状縄文が施文される。11、12は壺の肩部文様帯の一部で、羽状縄文である。11は3個のボタン状貼付文がつく。

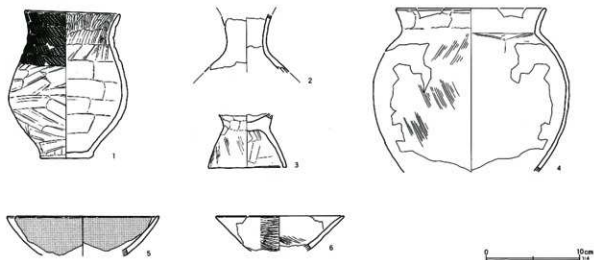
3、4は口唇部にキザミ目がつく台付甕の口縁部破片である。3の外側は木口ナデ、4は内外面ともに目の細かいハケメ調整が施される。

第2号周溝（第11・12図）

B-2、C-2、D-2グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、SD6を切っているため、本遺

構はSD6より新しい。SR4、SK1には切られており、本遺構はこれらの遺構より古い。SR6と重複するが、新旧関係は不明である。また、古墳跡であるSS1と、近・現代の遺構であるSD5に切られている。全体の平面形は、残った北半分の形状から、隅丸方形に溝が巡っていたものと推定される。東西に伸びる溝の長さが約13.5m、溝の幅は1.1~1.9m、溝の深さは東溝で28cm、北溝で20cm、西溝で最も浅く10cmに満たない。溝の底面は浅くて概ね平坦である。周溝に伴う土壌はなく、SD6と重複する部分でピットが検出されたが、本遺構に伴うものかどうかは明らかではない。周溝の覆土は、焼土と炭化物をわずかに含む茶褐色土である。

第12図 第2号周溝出土遺物



第2号周溝出土遺物観察表 (第12図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺	10.3	15.5	5.6	BW雲	褐	A	90	
2	壺				W	明褐	C	30	
3	台付甕			8.4	W	明赤褐	B	75	
4	台付甕	16.1			W	褐	B	45	
5	高環	(16.2)			B	浅黄橙	A	20	
6	高環	(13.7)			W	褐	A	20	

出土遺物は、SR6と重複する微妙な位置から吉ヶ谷式系土器(第12図1)が、底面から若干浮いて横につぶれた状態で出土した。北溝のピット内から甕形土器(4)が出土した。

出土土器 (第12図)

1は吉ヶ谷式系土器の小型壺である。やや尖りぎみの口径部から口縁直下でやや括れ、胴部で最大径となって膨らむ。口縁部から胴上部にかけて5段の輪積み痕を残し、輪積みの幅にあわせて単節斜縄文が施文される。胴部は丁寧な木ノナデが施される。内面は横方向の木ノナデ後、口縁から頸部にかけて縦方向に磨かれる。口唇部を一部欠く他は、ほぼ完形に近い。2は無文の壺頸部である。

4はくの字状口縁の台付甕になる。器面が摩耗しており判然としないが、胴部外面には一部ハケメが観察される。形がいびつであり、口縁部の器面調整もよくなされず、全体として雑な作りである。また、胴部の器厚が比較的薄手なこと特徴的である。

5、6は高環の体部で、口唇が尖がりぎみである。

第3号周溝・第6・8号溝 (第13～15図)

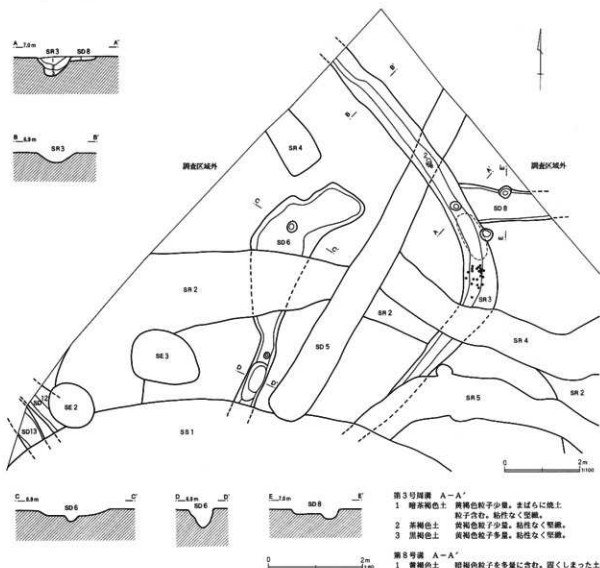
C-1・2グリッドに位置する。重複関係は、SR3がSD8を切っており、SR3はSD8より新しい。さらにSR4、SR5に切られており、これらの遺構より古い。また、近・現代の遺構であるSD5に切られている。SR3はSR4との重複部分から北側で、緩やかにカーブした後、北西方向にまっすぐ伸びる。溝の幅は0.8mと一定しており、溝の底面は船底形で、深さは30～40cmを測る。覆土は焼土粒子をまばらに含む茶褐色土である。

出土遺物は、溝が緩やかにカーブする部分で、甕形土器2個体、壺形土器1個体(第15図1・3・4)が一括投棄の状態出土した。

SD6は、SR2に切られており、この溝はSR2より古い。また、古墳跡であるSS1に切られる。やや蛇行しながら北東部で途切れる。溝の幅1.0m、深さ18cmを測る。出土遺物は土師器片が少量出土した。

SD8は東西方向にのびており、SR3に接続しておわる。溝の幅1.0m、深さ12cmを測る。覆土は暗褐色

第13図 第3号周溝・第6・8号溝



第3号周溝 A-A'
 1 暗茶褐色土 黄褐色粒子少量、まばらに焼土粒子含む、粘性なく堅緻。
 2 茶褐色土 黄褐色粒子少量、粘性なく堅緻。
 3 黒褐色土 黄褐色粒子多量、粘性なく堅緻。

第8号溝 A-A'
 1 黄褐色土 暗褐色粒子を多量に含む、固くしまった土。

第3号周溝出土遺物観察表 (第15図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺			(12.5)	W雲砂	橙	A	30	口縁部 口縁部
2	壺			9.6	W褐	明黄褐	B	70	
3	甕	(15.9)			W	橙	A	85	
4	台付甕	25.8			RW	灰黄褐	A	80	
5	壺				W	橙	B		
6	壺				褐	橙	A		

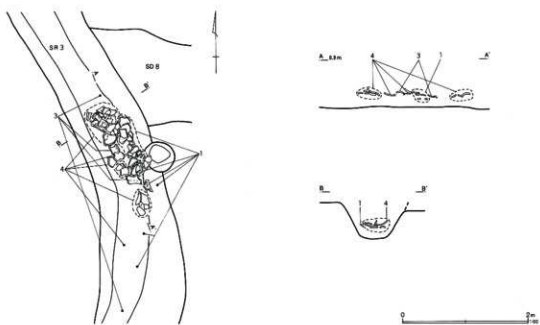
粒子を多量に含む黄褐色土である。

出土土器 (第15図)

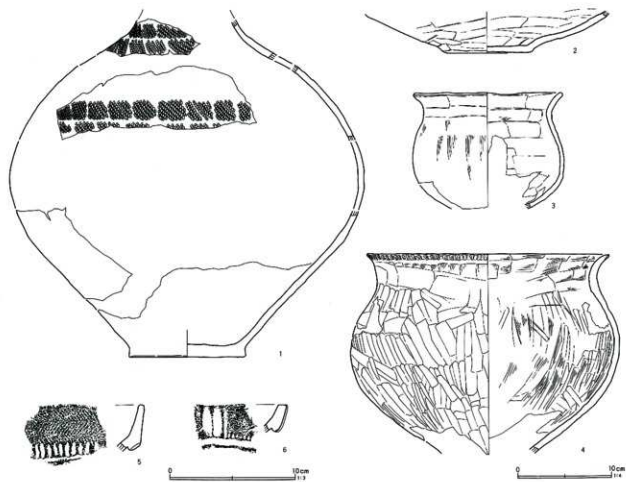
1~6は、全てSR3から出土したものである。このうち1、3、4は、1ヶ所からまとめて出土した。1は大型の壺形土器である。幅広い無文帯を間にはさんで、斜縄文による文様帯を2帯配する。縄文は筋が

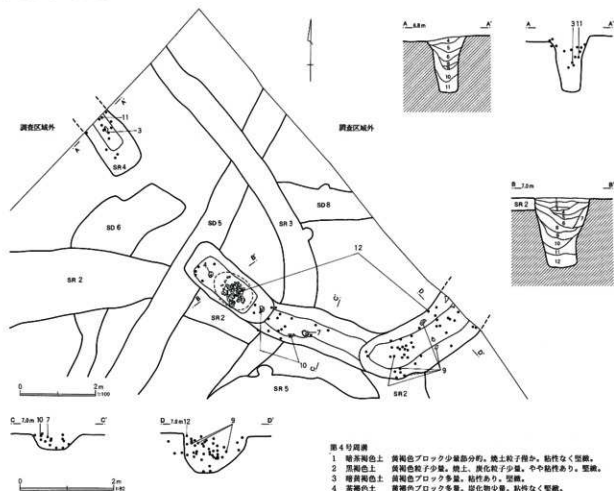
大きく、各文様帯に2段の施文が観察される。文様帯の上下は区画されない。2は壺の底部で、かなりの大型壺になる。3は小型の甕形土器である。外面は縦ハケメ後、横ナデされる。内面も横、斜方向のハケメ後、横方向に木口ナデされる。4は台付甕である。口縁部は大きく反し、頸部は縦やかに括れて胴部で最大径

第14图 第3号周溝遺物分布圖



第15图 第3号周溝出土遺物





第4号周溝

- | | |
|----------|---------------------------------|
| 1 暗茶褐色土 | 黄褐色ブロック少量節片。焼土粒子種か。粘性なく堅緻。 |
| 2 黒褐色土 | 黄褐色粒子少量。焼土、炭化粒子少量。やや粘性あり。堅緻。 |
| 3 暗茶褐色土 | 黄褐色ブロック少量。粘性あり。堅緻。 |
| 4 茶褐色土 | 黄褐色ブロック少量。炭化物少量。粘性なく堅緻。 |
| 5 暗茶褐色土 | 黄褐色粒子種か。炭化物少量。やや粘性あり。堅緻。 |
| 6 暗茶褐色土 | 黄褐色ブロック少量。焼土、炭化粒子少量。やや粘性あり。堅緻。 |
| 7 暗茶褐色土 | 黄褐色ブロック、同粒子少量。粘性なく堅緻。 |
| 8 茶褐色土 | 黄褐色粒子少量。同ブロック種か。やや粘性あり。堅緻。 |
| 9 黒褐色土 | 黄褐色粒子少量。炭化粒子種か。やや粘性あり。堅緻。 |
| 10 暗黄褐色土 | 黄褐色粒子少量。同ブロック少量。焼土粒子種か。粘性あり。堅緻。 |
| 11 黄褐色土 | 黄褐色ブロック主体。暗茶褐色土少量。粘性強く堅緻。 |
| 12 黒褐色土 | 黄褐色ブロック少量。粘性強く堅緻。 |

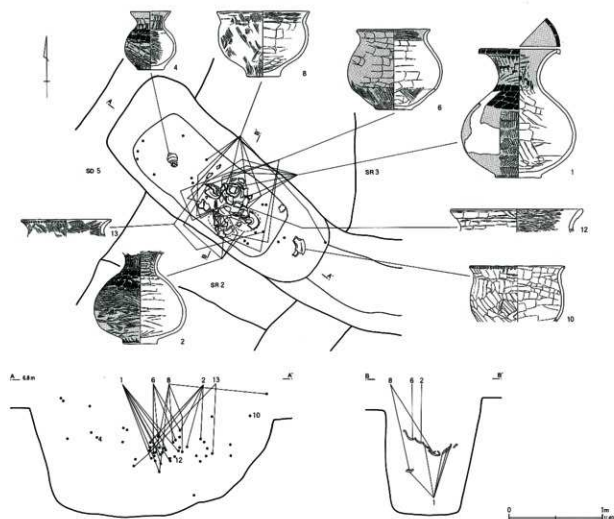
となって膨らんだ後、胴下部は直線的にすままる。口唇部にはハケメ状工具による連続ギザ目が施され、外面は目の細かい縦ハケメ後、口縁部には横方向、胴部には縦または斜方向のナデ調整が施される。ナデ調整は、胴下部は小口状工具によるが、頸部から胴上半部では、指頭によって行われたと推定される部分もあり、調整痕の断面が凹レンズ状になる。内面の調整は、口縁部が横ハケメ、胴部は横または斜方向のハケメ後、幅の狭いハケメ状工具で縦方向に粗くナデを加えている。5、6は壺形土器の複合口縁の破片で、5は羽状縄文、6は3本の棒状浮文がつく。

第4号周溝 (第16~19図)

C-1・2、D-2グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、SR 2、SR 3を切っており、本遺構はこれらの遺構より新しい。また、近・現代の遺構であるSD 5に切られている。

全体の形状はほとんどが調査区域外に出ているため、明らかではない。一定した幅の溝が西側で緩やかに曲がった後、北西方向にまっすぐ伸び、SD 5に重複する部分でやや北よりに向きを変えて、長方形の土壌を伴って途切れる。土壌に相対して調査区の壁にかかる状態で、再び掘り込みが始まっており、2.7mの

第17図 第4号周溝遺物分布図



間隔をもって陸橋状になる。溝の幅は1.0~1.3m、溝の深さは南東隅部で90cm、土壌と隅部との間で31cmを測る。土壌に相対する掘り込みの深さは1.2mと深く、同様の土壌になるものと考えられる。周溝の覆土は、焼土と炭化物を少量含む黒褐色土、または暗茶褐色土である。

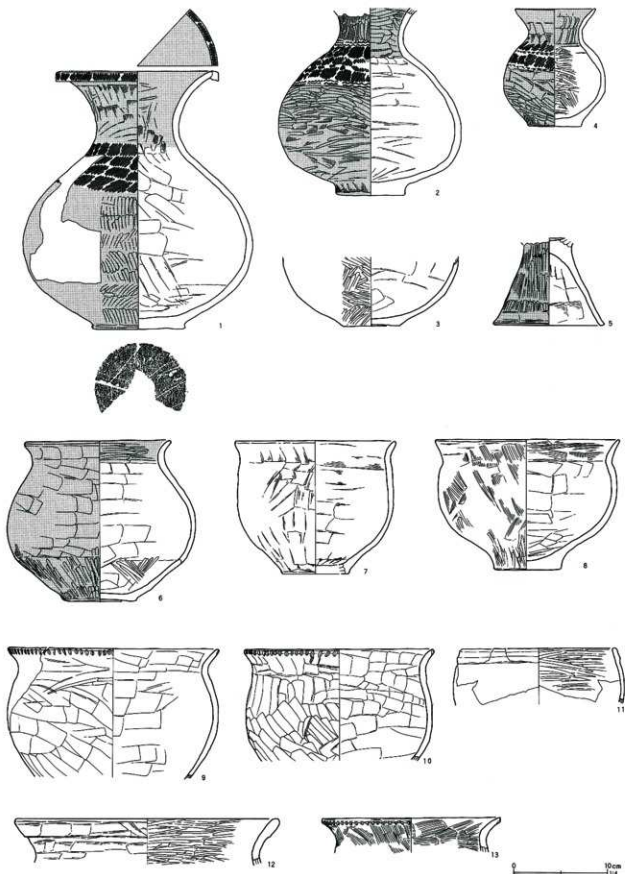
土壌は、長辺2.8m、短辺1.2mの長方形になり、深さ1.3mを測る。底面は、中央がやや凹むか概ね平坦であり、壁はやや開いて立ち上がる。覆土中層から多量の土器が一寸投棄された状態で出土した。土壌内の覆土は、上層に焼土粒子と炭化物を多量に含む茶褐色土、中層から下層にかけては暗黄褐色土と黒褐色土とが相互に堆積する。出土遺物は上層から中層にかけて出土しており、特に中層に集中する。

出土土器 (第18・19図)

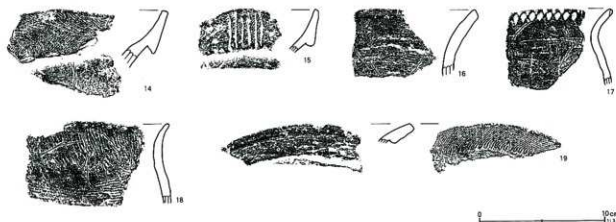
1は壺形土器で、頸部が緩やかにくびれて口縁部が大きく外反し、幅の狭い複合口縁になる。文様帯は口縁内面、複合口縁部、胴上部の3ヶ所で、いずれも斜縄文が施文される。口縁部には径13mmの円形朱文が巡る。胴上部文様帯は4段の縄文で、上下の区画はされない。頸部および胴部の無文部はハケメ後、よく磨かれて赤彩される。内面は胴部が木口ナデ、頸部はハケメ後よく磨かれて赤彩される。底部に木葉痕がつく。

2は口縁部を欠損する壺形土器で、胴部が下膨れ状になり、やや稜をもって底部にいたる。胴上部は撫で肩状に上がり、頸部で緩やかに括れて外反する。胴上部の文様帯は3段の縄文によって羽状縄文を構成し、上下を各2条のS字状結節文で区画する。径13mmの円

第18图 第4号周溝出土遺物 (I)



第19図 第4号周溝出土遺物(2)



第4号周溝出土遺物観察表(第18・19図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺	17.3	27.1	10.0	W雲	明黄褐	A	60	土壌内
2	壺			7.4	褐	明赤褐	A	100	土壌内
3	壺			6.0	W雲	橙	A	50	
4	小型壺	8.6	12.4	5.8	褐	黄橙	A	95	土壌内
5	高環			11.9	W雲	赤橙	A	95	
6	広口壺	15.7	17.0	7.9	W	黒褐	A	65	土壌内
7	広口壺 (17.2)	14.2	(7.3)		褐	赤	B	40	
8	広口壺 (19.7)	13.8	7.2		褐	明赤褐	A	60	土壌内
9	台付甕	22.6			褐	暗赤褐	A	60	胴部内面に多量の煤付着
10	台付甕	20.3			褐	暗赤褐	A	70	一部土壌内
11	環	(16.8)			W	におい橙	A	20	
12	広口壺 (28.3)				褐	赤褐	A	20	一部土壌内
13	台付甕 (19.1)				褐	黒褐	A	30	土壌内
14	壺				R褐	におい橙	A		口縁部 赤彩(頸部)
15	壺				W	におい黄橙	B		口縁部 赤彩(内面)
16	広口壺				褐	黒	B		口縁部
17	甕				W褐	黒	A		口縁部
18	広口甕				褐	橙	A		口縁部
19	壺				褐	におい黄橙	B		口縁部 赤彩(口縁・内面無文部) 円形朱文(内面)

形朱文が2～3cmの間隔で8個、縄文の1段目と2段目の境上に巡る。頸部と胴部無文部はハケメ後、粗い磨きが施されるが、ハケメ痕がかなり残る。内面は胴部が木口ナデ、頸部は横磨きが施される。

3は壺の底部で、外面は多方向によく磨かれる。

4は小型壺である。胴下部で最も膨らみ、頸部で立ち上がりぎみに括れ、口縁部がハの字状に開く。胴上部の文様帯は2段の斜縄文で、各下端には原体不明の結節文が巡る。口縁部から頸部にかけてと胴部無文部は、ハケメ後よく磨かれて赤彩される。内面は胴部が横磨き、口縁部は横ナデされて赤彩される。

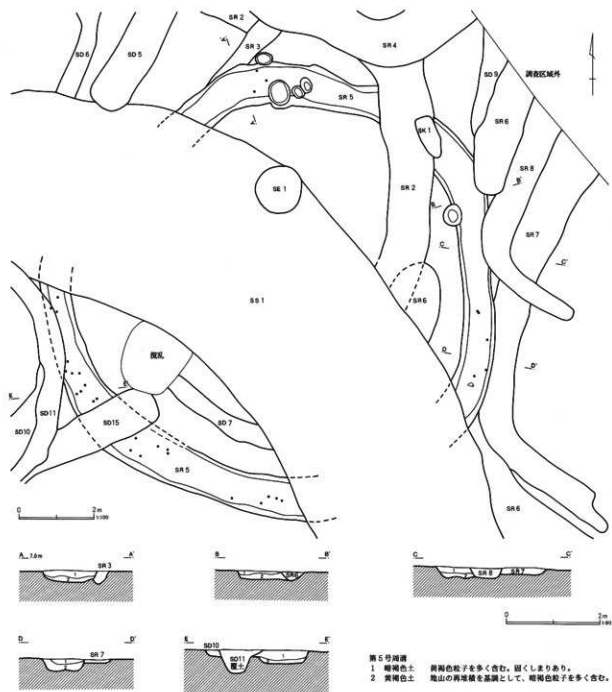
5、11は高環である。5は脚部で、外面は縦磨き後、

端部が横ナデされる。脚部外面と底部内面が赤彩される。11は無文の高環の体部で、口縁部が薄い折り返し状になり、胴部で膨らむ。内外面ともに丁寧な横磨きが施される。

6～8、12、16、18は広口壺である。6は胴部下位で膨らみ、やや稜をもって底部へすぼまり、口縁部は外反する。器面調整は、外面が口縁部から胴部にかけて横方向の木口ナデ、胴部下位は縦に密に磨きがかえられる。内面は胴部木口ナデ、口縁部横磨きである。

7は胴部があまり大きく膨らまず、口縁部でやや外に開く器形である。外面は口縁部が横方向、胴部が縦方向の木口ナデとなる。内面も全体に横方向の木口ナデ

第20図 第5号周溝



が施される。8は胴部上位が膨らみ、口縁部が守舌れて外反する器形である。外面は斜め方向のハケメ後、口縁部は横ナデ、胴部は斜めまたは縦方向に木口ナデが施される。内面は胴部木口ナデ、口縁部ハケメが施される。12は大型の口縁部の破片で広口壺になるものと思われる。外反して折り返し状の口縁になり、外面は木口ナデ、内面は丁寧な横磨きが施される。16は無文

で、内外面ともに丁寧な横ナデが施される。18は内外面の器面調整が8に近似する。

9、10、13、17は、口唇部にキザミ目がつく台付甕である。9は胴部中位で口径とほぼ同じ径で膨らみをもつ。外面は口縁部から胴部中位まで横方向、胴部下位に斜方向の木口ナデが施される。内面は横方向の木口ナデが施される。10はやや下膨れの胴部となり、口

第21図 第5号周溝出土遺物



第5号周溝出土遺物観察表(第21図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺				褐	にぶい黄褐色	A		口縁部
2	壺				褐	赤褐色	B		口縁部
3	壺				褐	明赤褐色	B		口縁部

縁部が短く外反する。外面は口縁部に横方向、胴部上半に縦方向、胴部下位に斜方向の木口ナデが施される。13は口唇部が平坦になり、内外面ともにハケム調整となる。17は両面に丁寧な木口ナデが施される。

14、15、19は壺の複合口縁部の破片で、14は細い原体によって口唇部に斜縄文、口縁部に単節羽状縄文が施文される。15は棒状浮文を6本の集合沈線に代えて表現している。19は大きく外反する幅狭の複合口縁で、口縁部は無文で内面に文様帯をもつ。内面文様帯は斜縄文を施文し、径10mmの円形朱文を約3cmの間隔で配する。1条のS字状結節文で下端を区画する。

第5号周溝(第20・21図)

C-2・3、D-2・3グリッドに位置する。SR3、SR7を切っており、本遺構はこれらの遺構より新しい。SR2、SR6、SR8、SD11、SD15に切られており、本遺構はこれらの遺構より古い。また、古墳跡であるSS1に切られる。

全体の平面形は不整形円形になるものと推定され、遺構の規模は直径12.5m、溝の幅0.9~1.1m、溝の深さ20cmを測る。溝の底面は平坦で、段差などは見られない。覆土は暗褐色土である。

出土遺物は溝の覆土から古墳時代前期の土器小片が少量出土した。

出土土器(第21図)

いずれも破片で、遺構の時期を決定できる遺物はない。1は折り返し口縁で、幅の狭い口縁部に燃りの細かい斜縄文、内面には羽状縄文が施文される。2、3は無文の壺口縁部で、2は口唇部が平坦になり、口縁下端に段がついて複合口縁風になる。

第6~8号周溝・第9号溝(第22・23図)

D-2・3、E-3グリッドに位置する。SR6はSD9、SR5、SR8を切っており、これらの遺構より新しい。SR5はSR7を切り、SR8はSR5、SR7を切っている。

これらの切り合いによる新旧関係から、以下のような遺構の構築順序が推定される。すなわち、SR7⇒SR5⇒SR8⇒SR6、およびSD9⇒SR6である。

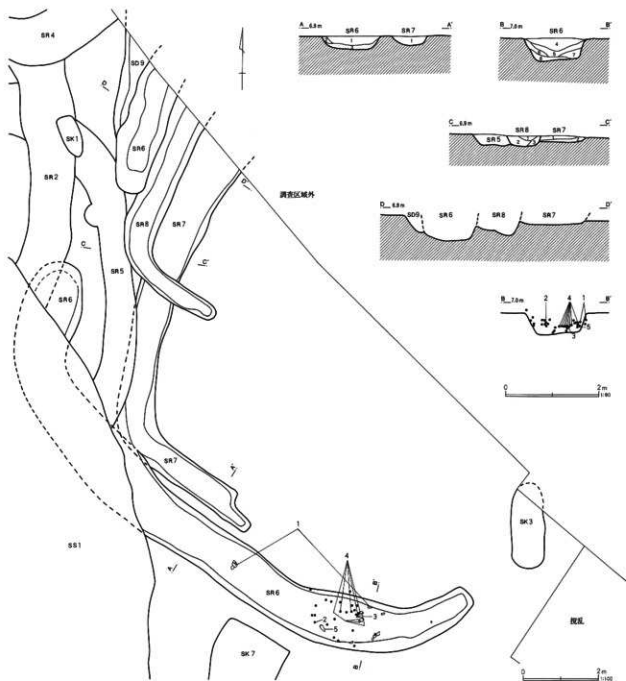
SR6は鍵形に巡る周溝で、隅部が丸くなる。SR2との重複部分で、いったん途切れ、SD9と重複して再び北東方向に伸びるものと考えたが、不明な点も多い。あるいはSS1に壊されて不明な部分であるが、SR7の北東方向に伸びる溝に連なっていたのかも知れない。南東隅部でも溝がいったん途切れる。延長上の位置にSK3があり、SR6と同時期の遺物が出土しているが、両者の関係は不明である。

遺構の規模は、南東隅部からSR2との重複部分までの溝の長さが約14.3m、溝の幅は1.0~1.3m、溝の深さは20~25cmである。周溝の覆土は黄褐色粒子を多量に含む暗褐色土である。

SR7、SR8はSR6の北東方向の溝に沿って伸びる鍵形の周溝である。SR7は溝幅0.8~1.2m、深さ20cmで、北東方向に伸びるにしたがって、幅広く浅くなる。SR8は、溝幅0.5~0.8m、深さ20cmである。SR7、SR8ともに、出土遺物は土器片数片で、図示できるものはない。

SD9は深さ20cmを測る。覆土中から土器片が少量出土したが、図示できるものはない。

第22図 第6～8号周溝・第9号溝



第6号周溝 A-A' B-B'

- 1 暗褐色土 粘性あるがしまった固い土。黄褐色粒子を含む。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土に黄褐色粒子を多量に含む。
- 3 黄褐色土 粘性あり、固くしまっている。暗褐色粒子を含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色粒子を多量に含む。
- 5 黒褐色土 炭化粒子、焼土粒を含み、細かい黄褐色粒を少量含む。粘性強い。
- 6 暗黄褐色土 大粒の焼土粒子を含み、黄褐色土を多量に含む。粘性あり。
- 7 暗黄褐色土 炭化粒子を少量含む。黄褐色土を多量に含む。粘性あり。
- 8 黒褐色土 細かい黄褐色粒を少量含む。粘性強く、しまっている。

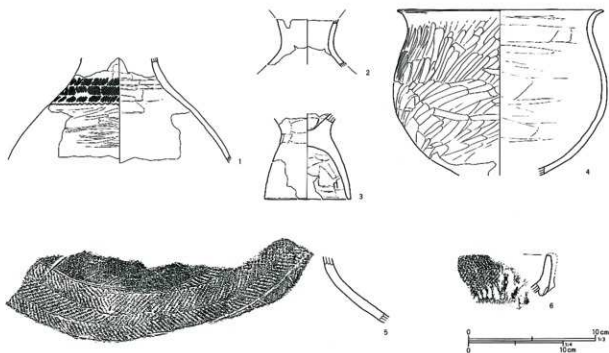
第7号周溝 A-A' C-C'

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子を含む。固くしまりあり。
- 2 黄褐色土 黄褐色粒子、ブロック状に多く含む。粘性あり。

第8号周溝 C-C'

- 1 暗黄褐色土 黄褐色ブロック、黄褐色粒子多量。
- 2 暗褐色土 黄褐色粒子を多く均質に含む。粘性強い。
- 3 暗褐色土 2層より大粒の黄褐色粒子をより多めに含む。粘性強い。

第23図 第6号周溝出土遺物



第6号周溝出土遺物観察表 (第23図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺				W	明褐	A	45	胴部 赤彩(頸部無文部) 口縁部
2	壺				W	橙	B	70	
3	台付甕			9.2	W	明赤褐	A	80	
4	台付甕	(22.0)			褐	暗褐	B	70	
5	壺				W	浅黄橙	A		
6	壺				W	橙	B		

出土土器 (第23図)

すべてSR6の覆土中から出土したものである。1は壺彩土器の頸部直下から胴上半部である。羽状縄文による胴部文様帯を配し、文様帯の下端には1条のS字状結節文が巡る。胴部は横磨きがなされる。2は無文の小型壺の頸部である。5は壺の肩部文様帯の一部で、羽状縄文の上下を磨り消し、先の尖った工具による沈線で文様帯を区画する。羽状縄文の下には、沈線によるへろ字状の磨り消し区画文を配する。6は壺の複合口縁部の破片で、単節斜縄文と2本の棒状浮文が付き、口縁下端にはキザミ目がつく。

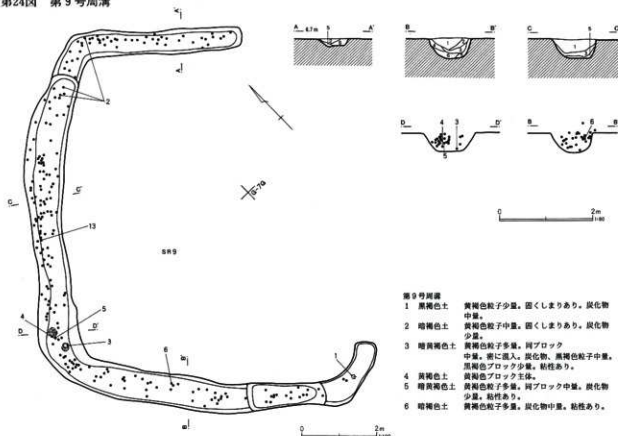
3、4は台付甕である。4は口縁部が強く外反し、頸部で緩やかに括れて胴部中位で膨らみをもつ。最大径は胴部中位になる。口唇部にはキザミ目がかかない。器面調整は、外面には斜方向の木口ナデが密に施され、

内面は横木口ナデである。

第9号周溝 (第24・25図)

F-6・7、G-6グリッドに位置する。3辺が巡るコの字形の周溝で、南隅部で鋸形に曲がって途切れる。北東溝はまっすぐ伸びるが、北西溝は大きく膨らみを見せ、南西溝もややカーブしながら伸びる。遺構の規模は、1辺の長さが10mを測り、溝幅は0.6-0.8m、北西溝では最も膨らんで1mを測る。溝の深さは40cm、北東溝と南隅部では浅くなり、10-20cmとなる。周溝の底面は、北隅部から北西溝がはじまる部分で段差をもって深くなり、南西溝の一部で凹み状段差が認められた。周溝が囲む部分からはビットや土壌などの遺構は検出されなかった。出土遺物は、西隅部の覆土中から甕彩土器が2個体 (第25図3・4)、南隅部で壺彩土器の大型破片 (1) が出土した。

第24図 第9号周溝



- 第9号周溝
- 1 黒褐色土 黄褐色粒子少量、面くしまりあり。炭化物中量。
 - 2 暗褐色土 黄褐色粒子中量、面くしまりあり。炭化物少量。
 - 3 暗黄褐色土 黄褐色粒子多量、同ブロック中量。紫に混入。炭化物、黄褐色粒子中量。黒褐色ブロック少量、粘性あり。
 - 4 黄褐色土 黄褐色粒子多量、同ブロック中量。黄褐色ブロック主体。
 - 5 暗黄褐色土 黄褐色粒子多量、同ブロック中量。炭化物少量、粘性あり。
 - 6 暗褐色土 黄褐色粒子多量。炭化物中量、粘性あり。

出土土器 (第25図)

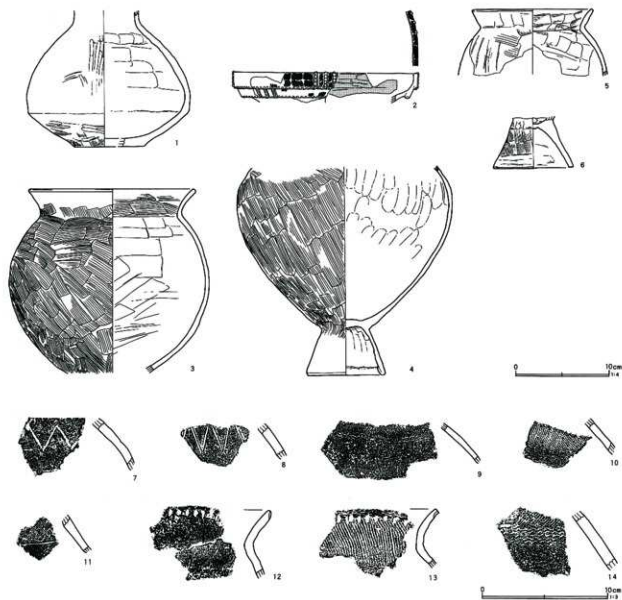
1は無文の壺形土器の破片である。頸部直下からなで肩状に落ちて、胴下部で稜をもって屈曲して底部に至る特徴的な器形を呈する。外面は、胴部上半では縦磨き、胴下部では横または斜方向の磨き、内面は横木口ナデが施される。2は壺の口縁部破片である。2段の複合口縁になり、各複合部には縄文を施文、3本のキザミが入った棒状浮文、下端には連続キザミ目加えられる。1段目には羽状縄文、2段目には斜縄文を配する。頸部は急な傾斜をもってすぼまる。口唇部は平坦で斜縄文を施文、円形朱文が観察される。たいへん特徴的な土器である。

7~11、14は壺の肩部文様帯の一部になる。7、8は鋸歯状沈線による区画文が施される。7は区画された上部に縄文があり、8は羽状縄文を施文後、沈線で区画して下部を磨き消し、無文部を赤彩する。9~11、14は肩部文様帯の下端部で、9は付加条縄文が施文され、3条のS字状結節文で下端を区画される。10は無

区画、11は羽状縄文が細い沈線で区画される。14は6条のS字状結節文で区画される。いずれも下部無文部は赤彩される。

3~6、12、13は甕形土器である。3は頸部でくの字状に括れ、口縁がやや外反しながら開く台付甕で、胴部には3球形を呈する。器面調整は口縁部が斜めハケメ後、上半部が横ナデされる。胴部は上位が横、中位から下位にかけては斜めハケメである。内面は胴部が横または斜め方向の木口ナデ、口縁部は横ハケメが残る。4はS字状口縁台付甕になるものと思われる。胴部外面は斜め方向のハケメが粗く施され、内面には指頭による押しえ痕が顕著である。脚台部の端部内側は折り返し状になる。全体的に薄手の作りで、胎土には砂粒が多く含まれる。5は小型の甕形土器で、口縁部はハケメ後、横ナデされる。6は脚台部である。12、13は口唇部にキザミ目がつく甕の口縁部破片である。12は外面ハケメ後、木口ナデ、内面横ハケメ、13は口唇部が面取りされ、外面縦ハケメ、内面横ハケメである。

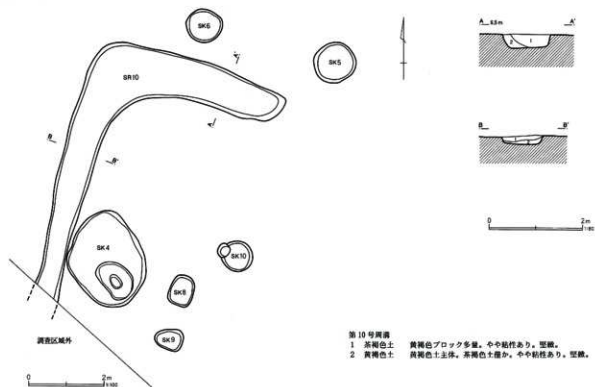
第25図 第9号周溝出土遺物



第9号周溝出土遺物観察表 (第25図)

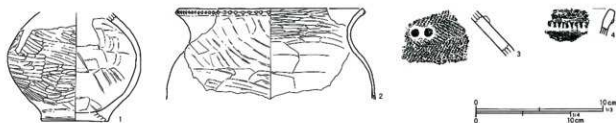
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺			7.3	W	赤褐	A	50	
2	壺	(19.8)			W褐	明褐	A	20	
3	台付甕	17.8			W褐雲	にふい褐	A	100	
4	台付甕			8.4	W雲砂	にふい黄橙	A	60	
5	台付甕	12.9			褐	褐	B	25	
6	台付甕			8.6	RW	赤褐	A	95	
7	壺				褐	橙	B		胴部
8	壺				W褐	赤褐	A		胴部 赤彩(下部無文部)
9	壺				褐	にふい黄橙	A		胴部 赤彩(下部無文部)
10	壺				褐	にふい黄橙	A		胴部 赤彩(下部無文部)
11	壺				W褐	暗赤褐	A		胴部 赤彩(下部無文部)
12	甕				W褐	黒褐	B		口縁部
13	甕				W褐	にふい黄橙	B		口縁部
14	壺				褐	にふい黄橙	B		胴部 赤彩(下部無文部)

第26図 第10号周溝



第10号周溝
 1 茶褐色土 黄褐色ブロック多量、やや粘性あり、空疎。
 2 黄褐色土 黄褐色土主体、茶褐色土層か、やや粘性あり、空疎。

第27図 第10号周溝出土遺物



第10号周溝出土遺物観察表 (第27図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺			7.3	R褐	明黄褐	A	90	胴部 口縁部 赤彩(外面・口唇部・内面)
2	台付甕	20.4			褐	褐	A	20	
3	壺				W褐	黒褐	A		
4	高坏				W褐	にぶい黄橙	A		

第10号周溝 (第26・27図)

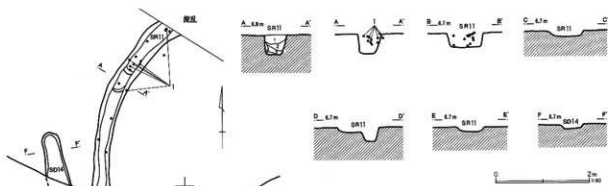
E-8・9、F-8グリッドに位置する。L字形に曲がる周溝である。溝幅0.6~1.0m、溝の深さ20~30cmを測る。周溝が閉む内側からはSK4・8・9・10などの土壌が検出されたが、この周溝に伴う遺構かどうかは不明である。周溝の覆土は黄褐色ブロックを多量に含む茶褐色土である。

出土遺物は、覆土中から壺形土器(第27図1)、甕形土器の破片(2)が出土した。

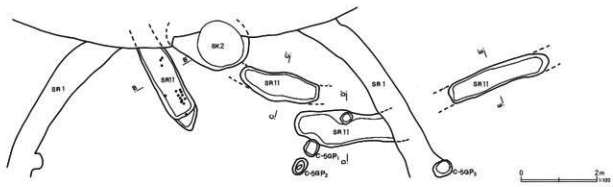
出土土器 (第27図)

1は壺形土器である。胴部外面は丁寧な横磨きか施される。2は台付甕の破片である。口唇部が平坦に面取りされ、キザミ目か加えられる。器面調整は内外面ともに木口ナデで、口縁部内面は密に施される。3は壺の胴部破片で、羽状縄文帯を配し、2個のボタン状貼付文がつく。4は高坏の口縁部破片と思われる。口縁直下に折り返し状の段をつけ、連続キザミを施す。口唇部は平坦になる。

第28図 第11号周溝・第14号溝



- 第11号周溝 A-A'
- 1 黒褐色土 黄褐色粒子、炭化粒子多量。しまりあり。
 - 2 暗黄褐色土 黄褐色ブロック、黄褐色粒子多量。黒褐色粒子、筒ブロック少量。しまりあり。
 - 3 暗黄褐色土 黄褐色ブロック、黄褐色粒子、黒褐色ブロック多量。粘性。しまりあり。
 - 4 黄褐色土 堆山に起因する黄褐色ブロック、暗褐色粒子混入。



第29図 第11号周溝・第14号溝出土遺物



第11号周溝・第14号溝出土遺物観察表 (第29図)

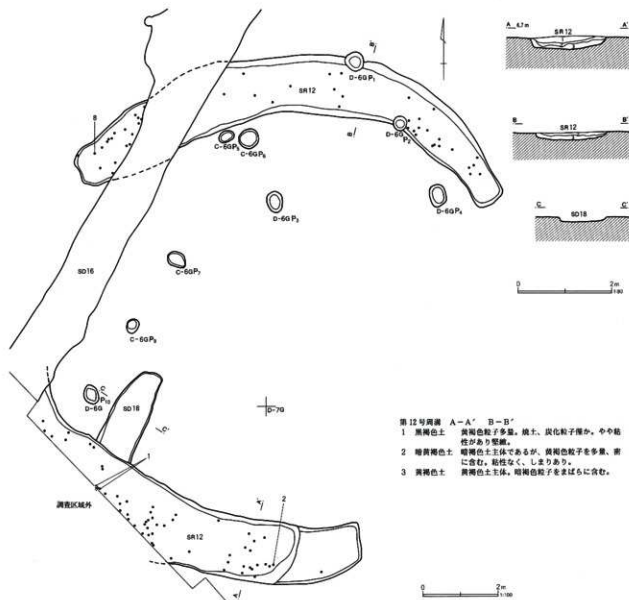
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺	13.7			褐	黒褐色	A	50	SR11
2	壺				RW	橙	B		口縁部 SR11
3	壺				W褐	褐	B		口縁部 SD14

第11号周溝・第14号溝 (第28・29図)

B-4・5、C-5グリッドに位置する。古墳跡であるSS1に一部破壊されている。北から西にかけて大きく弧を描いて伸びる周溝がいったん途切れ、南側では浅く途切れ途切れになって続くものと調査時点では考えたが、別個の溝だった可能性もある。溝幅0.5~0.8m、深さは北西部の周溝が30~40cm、南溝は10cm

と浅い。北西部の周溝は底面が平坦で、壁も直線的に立ち上がり、溝の断面形は箱形になる。覆土は上層が黒褐色土、下層が暗黄褐色土になる。周溝が囲む内側からSK2が検出されたがSR11に伴う遺構かどうかは不明である。

SD14は幅0.6m、深さ12cmを測る。出土遺物は土師器片が少量出土した。



第12号周溝 A-A' B-B'
 1 黒褐色土 黄褐色粒子多量。焼土、炭化物粒子僅か、中々粘性あり堅固。
 2 暗黄褐色土 暗褐色土主体であるが、黄褐色粒子を多量、密に含む。粘性なく、しまりあり。
 3 黄褐色土 黄褐色土主体。暗褐色粒子をまばらに含む。

出土土器 (第29図)

1、2はSR11、3はSD14から出土した。1は無文の壺である。頸部がなだらかに括れ、口縁部が外反しながら開く。外面は縦磨き内面は横磨きされる。2は無文の壺の口縁部破片で、口縁部が折り返し状になる。3は幅の狭い複合口縁で、外面は無文、内面は羽状縄文にボタン状貼付文が1個つく。

第12号周溝・第18号溝 (第30・31図)

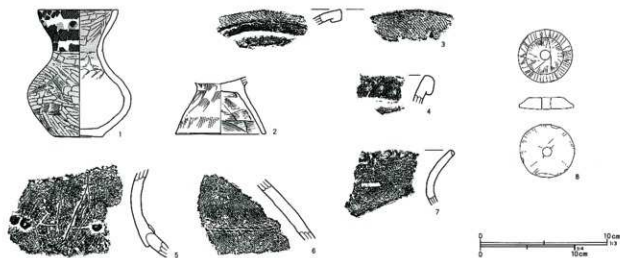
C-6・7、D-6・7グリッドに位置する。SR12は、近・現代の遺構であるSD16に切られる。SR12がSD18を切って重複する。

SR12は、2つの弧を描く周溝が相対しており、東部と西部が途切れて円形に囲む様相を呈する。2つの弧状周溝が囲む円形の外周は、直径14mを測る。2つの周溝ともに、溝幅が最も広い部分で1.7m、溝の深さは10~30cmを測る。底面は概ね平坦である。周溝の覆土は黄褐色粒子を多量に含み、焼土と炭化物をわずかに含む黒褐色土である。

ピットは周溝が囲む内側部分から7基、周溝に重複して2基検出されたが、この遺構に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物は、覆土中から小型壺 (第31図1) と石製

第31図 第12号周溝出土遺物



第12号周溝出土遺物観察表 (第31図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	小型壺	8.5	13.4	5.1	W褐	赤褐	A	95	口縁部 赤彩(頸部) 円形朱文(口縁部) 口縁部 赤彩(頸部) 円形朱文(口縁部) 頸部 胴部 円形朱文(2列) 口縁部
2	台付甕			(9.7)	BW灰	赤褐	B	35	
3	壺				褐	にぶい黄橙	B		
4	壺				W褐	明赤褐	B		
5	壺				褐	橙	B		
6	壺				W褐	明黄褐	A		
7	甕				褐	にぶい黄橙	B		
8	紡錘車	上径2.9cm	下径4.5cm	厚さ9mm	孔径8mm	重量26.25g	石質滑石		

紡錘車 (8) が出土した。

SD18はSR12に切られており、SR12より古い溝である。幅1.0m、深さ11cmを測る。覆土中から土師器片が少量出土したが、図示できるものはない。

出土遺物 (第31図)

すべてSR12からの出土遺物である。1は小型の壺形土器である。胴部でやや下膨れ状に膨らみ、頸部は緩やかに括れる。口縁部ではやや立ち上がりぎみになり、口唇部は平坦になる。文様帯は口縁部から頸部にかけての1帯で、頸部に1本沈線で区画し、無節縄文を施す。無節縄文は施文方向が一定せず、区画内に充填している。区画沈線以下の胴部無文部は、斜めまたは縦方向のハケメ後、よく磨かれて赤彩される。縄文区画内には径0.9cmの円形朱文が11個、1.0~1.5cmの間隔で巡る。内面はよく磨かれ、口唇部から頸部内面まで赤彩される。

2は台付甕の脚台部で、裾部がやや膨らみながら、ハの字状に開く。

3~6は壺形土器の破片である。3は幅の狭い複合口縁で、口縁部と内面に斜縄文が施され、口縁部には円形朱文が1ヶ所観察される。4は無文の折り返し口縁である。5は肩部に斜縄文による文様帯を配し、上部は沈線で区画され、2個1組のボタン状貼付文がつく。6は胴部文様帯で、4条のS字状結節文の上下に羽状縄文が施され、さらに2列の円形朱文がつく。

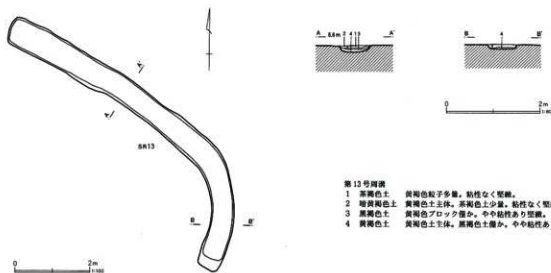
7は甕形土器の口縁部破片である。口唇部には連続キザミ目がつく。

8は石製紡錘車である。先の鋭い工具によって、上面、斜面部、下面端部に放射状の細線が刻まれる。

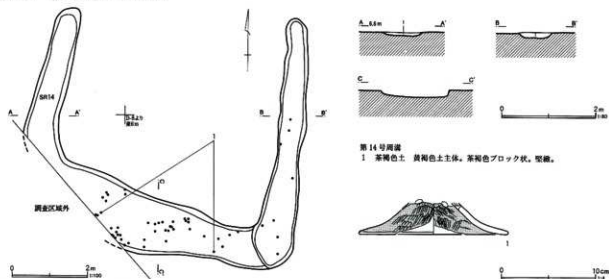
第13号周溝 (第32図)

D-6・7、E-7グリッドに位置する。隅部が緩やかに曲がるJ字形の周溝である。溝幅0.7m、溝の深さ10~15cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや開いて立ち上がる。覆土は黒褐色土である。周溝の覆土中から弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土師器が少量出土したが、図示できるものはない。

第32図 第13号周溝



第33図 第14号周溝・出土遺物



第14号周溝出土遺物観察表 (第33図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	器台			(16.0)	褐	赤褐	A	15	円孔

第14号周溝 (第33図)

D-7・8、E-7・8グリッドに位置する。コの字形に巡る周溝である。

遺構の規模は、南溝の東西方向の長さか推定7.5m、東溝の長さは6.5mを測る。溝幅は東溝0.6~0.8m、西溝0.7~0.8m、南溝が最も広く1.0~1.6mとなる。溝の深さは10cmを測る。底面の状態は、ほぼ平坦で、壁はやや開いて立ち上がる。周溝の巡る内側には、土塊

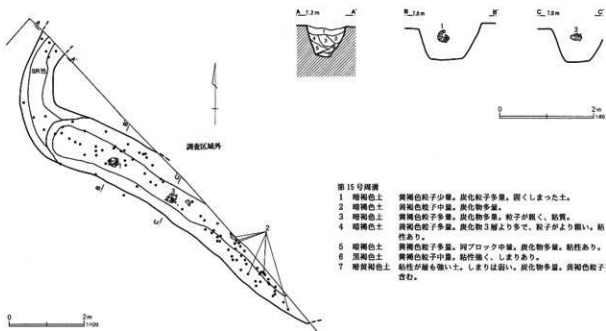
やビッドは検出されなかった。

周溝の覆土は、黄褐色ブロックを多量に含む茶褐色土である。覆土中から古墳時代前期の土師器が少量出土した。

出土土器 (第33図)

1は高坏または器台の脚部である。円孔があり、内外面が赤彩される。器面調整は、内外面とも縦磨きが施される。

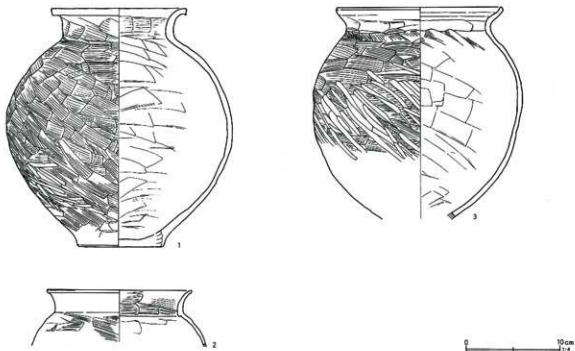
第34図 第15号周溝



第15号周溝

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子少量。炭化物多量。固くしまった土。
 2 暗褐色土 黄褐色粒子中量。炭化物多量。
 3 暗褐色土 黄褐色粒子多量。炭化物多量。粒子が粗く、粘質。
 4 暗褐色土 黄褐色粒子多量。炭化物3層より多で、粒子がより粗い、粘性あり。
 5 暗褐色土 黄褐色粒子多量。阿ブロック中量。炭化物多量。粘性あり。
 6 暗褐色土 黄褐色粒子中量。粘性強く、しまりあり。
 7 暗褐色土 粘性が最も強い土。しまりは弱い。炭化物多量。黄褐色粒子を含む。

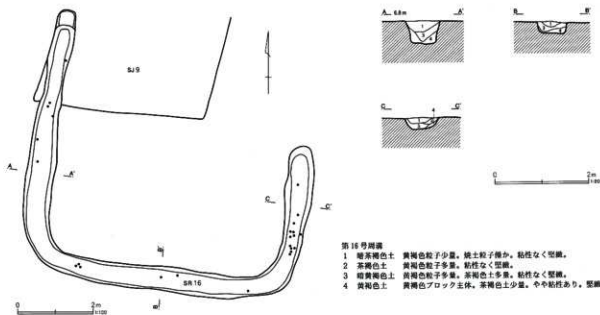
第35図 第15号周溝出土遺物



第15号周溝出土遺物観察表 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺	14.4	25.4	9.3	W褐雲	明赤褐	A	90	
2	甕	15.4			W	明赤褐	A	60	
3	白付甕	17.8			RW	黒褐	A	95	

第36図 第16号周溝



第15号周溝 (第34・35図)

E-3・4、F-4グリッドに位置する。調査区の壁にかかっているため、全容は不明だが、鍵形に巡っており、隅部は緩やかに曲がる。北西-南東方向に伸びる溝の長さは、9-10mになると推定される。溝幅は0.8-1.3m、溝の深さは70cmを測る。周溝の底面はほぼ平坦で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形になる。覆土は黄褐色粒子と炭化物を多く含む暗褐色土である。遺物は覆土下層から上層にかけて分布し、覆土中層から壺(第35図1)と甕(3)がほぼ完形に近い状態で出土した。

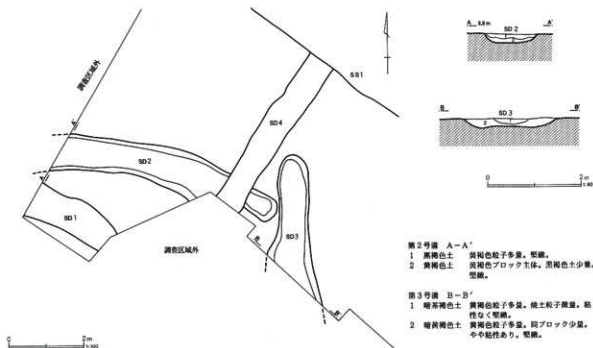
出土土器 (第35図)

1は壺形土器である。胴部はほぼ球形に膨らみ、頸部で垂直に立ち上がり、口縁部は口唇近くで外反し、突帯状に折り返される。外面の調整は、頸部から胴部にかけて斜め方向のハケメが施され、頸部上半はハケメ後、横ナアされる。内面は胴部木口ナア、頸部は横ハケメで、口縁部は横ナアされる。2は甕形土器の破片である。頸部屈曲後外反し、口唇部外側で幅狭く折り返される。頸部内面の屈曲部には、1枚粘土を盛ったような独特な形態になる。外面の調整は、胴部が横ハケメ、口縁部は丁寧に横ナアされる。内面は胴部が

横木口ナア、口縁部は横ハケメのままである。3は台付甕になるものと思われる。胴部はやや長胴ぎみになり、胴部上位で最大径となって膨らむ。頸部は屈曲した後やや立ち上がり、短く開いて口唇部が断面三角形となるが、先はあまり尖らない。頸部から口縁部にかけての形状が受け口状となり、特徴的な器形である。外面の調整は、口縁部が横ナア、胴部が横ハケメで、胴部中位にはハケメ後、棒状工具による斜方向からの粗いナアが加えられる。胴下半部は器面が剥落し、不明瞭である。内面は斜方向の木口ナア、口縁部は丁寧に横ナアが施される。

第18号周溝 (第36図)

F-5グリッドに位置する。奈良時代の住居跡S J 9に、西溝の覆土を一部切られる。隅丸のコの字形に巡る周溝となる。遺構の規模は、コの中に囲む外周の東西幅7.6m、南北幅7.0mとなる。溝幅は0.5-0.7m、溝の深さは東・南溝で25cm、西溝で50cmを測る。溝の底面はほぼ平坦で、壁はやや開いて立ち上がり、断面形は箱形となる。覆土は、黄褐色粒子を多く含む暗黄褐色土である。出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土師器が少量出土したが、図示できるものはない。



第2号溝 (第37図)

A-5グリッドに位置する。近・現代の溝であるSD4に切られる。ややカーブしながら伸びて、南部でSD3に重複しないで途切れる。

遺構の規模は、全長は現存で5.9m、幅1.1m、深さ31cmを測る。溝の断面は浅いU字形である。覆土は黄褐色粒子を多量に含む黒褐色土である。

出土遺物は、覆土中から土師器片が少量出土したが、図示できるものはない。

第3号溝 (第37図)

A-5グリッドに位置する。ややカーブしながら南北方向にのびる。

遺構の規模は、全長は現存で3.3m、幅1.1m、深さ13cmを測る。溝の断面は浅いU字形である。覆土は黄褐色土を多量に含む暗茶褐色土である。

出土遺物は、覆土中から土師器片が数片、壺底部片が出土したが、図示できるものはない。

SD2・3の遺構の時期は、覆土が階溝に近似することから、概ね弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと考えられる。また、両溝は弧状にカーブしながら

伸びることから、周溝の一部である可能性もある。

第7号溝 (第38・40図)

C-3グリッドに位置する。古墳跡であるSS1に切られ、攪乱で途切れる。SR5に沿ってカーブしながら伸びる。溝の幅0.6m、深さ26cmを測る。形態としては、近接するSD11に近似する。

出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土師器(第40図1)が出土した。

出土土器 (第40図)

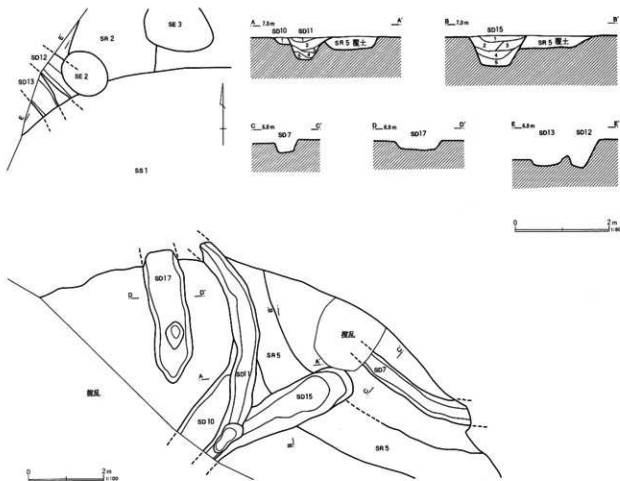
1は台付甕の脚部である。外面は縦ハケメ後、端部に軽く横ナデが加えられる。

2は変形土器の口縁部破片である。大きく外反して幅狭い複合口縁となり、5本1組の棒状浮文がつく。口縁部には斜縄文が施文される。内面には幅の狭い3段の縄文帯によって羽状縄文となり、下部の無文部は赤彩される。

3-5は壺の胴部破片である。3、4は斜縄文を沈線で区画しており、5は羽状縄文となる。

6は台付甕の口縁部から胴部にかけての破片である。頸部が緩やかに捩れ、口唇部にはキザミがつく。

第38図 第7・10～13・15・17号溝



第10号溝 A-A'

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子多く含み、黄褐色ブロック含む。固くしまりあり。

第11号溝 A-A'

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子まばらに含む。固くしまりあり。
- 2 暗褐色土 黄褐色粒子多量。黄褐色ブロックを含む。焼土粒子、炭化粒子含む。固くしまりあり。
- 3 灰褐色土 黄褐色粒子多く含み、大粒の炭化物少量。粘性、しまりあり。
- 4 暗黄褐色土 黄褐色ブロック多量。焼土粒子、炭化粒子少量。
- 5 暗褐色土 黄褐色粒子多量。焼土粒子、炭化物中程度含む。

第15号溝 B-B'

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子多量。焼土粒子少量。固くしまりあり。
- 2 暗褐色土 黄褐色粒子、炭化粒子多量。焼土粒子中量。
- 3 暗褐色土 黄褐色粒子まばらに含む。焼土粒子、炭化粒子多量。
- 4 暗黄褐色土 黄褐色ブロック少量含み。黄褐色粒子多量。粘性強い。
- 5 暗黄褐色土 黄褐色ブロック多量。黄褐色粒子多量。粘性強い。

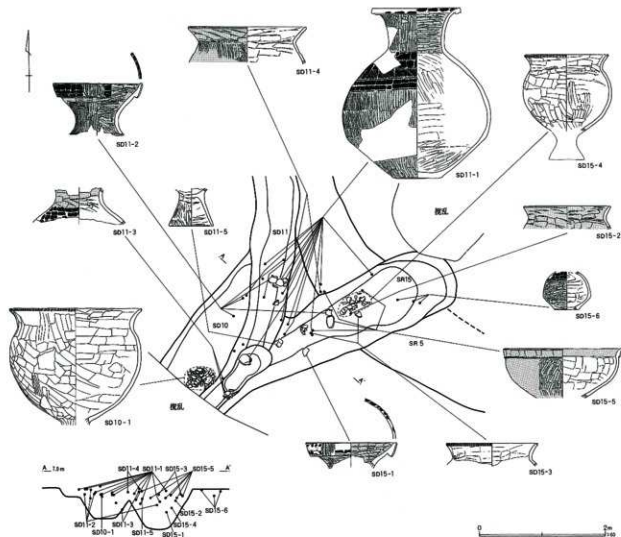
第10・11・15号溝 (第38・39・41～43図)

B-3、C-3グリッドに位置する。北側を古墳跡SS1、南側を擾乱に壊され、全容は把握できないが、3条の溝が切り合い、さらにSR5に重複する。SD11はSD10、SD15、SR5を切って構築され、SD15はSR5を切って構築されている。SD10とSD15は位置的に重複するが新旧不明である。したがって、切り合いによる新旧関係は、SR5⇒SD15⇒SD11、およびSD10⇒SD11であると考えられる。これら3条の溝の覆土中からは多量の土器が出土した。

SD10は幅広いの溝で、SR5に重複しないで途切れる。溝の深さ38cmを測る。覆土は黄褐色粒子を多量に含む暗褐色土である。覆土中から台付甕(第41図1)が横につぶれた状態で出土した。

SD11は、幅の狭い溝が西側に弧を開いてのびる。溝ののびる延長上にはSD12・13があり、あるいは同一の溝だった可能性もある。溝の幅0.7m、深さ54cmを測る。溝の断面は逆台形である。覆土は焼土粒子を含む暗褐色土である。覆土中から壺型土器(第42図1)をはじめ、多くの土器片が出土した。

第39図 第10・11・15号溝遺物分布図



SD15は幅広い溝で、SR5に重複して途切れ、南側に弧を開いて緩やかにカーブする。溝の幅1.1m、深さ67cmを測る。溝の断面は逆台形になる。覆土は炭化物を多量に含む暗褐色土である。覆土中からは、脚台部を欠損する台付甕（第43図4）や高環（5）などの土器をはじめ、多くの土器が出土した。

出土土器（第41～43図）

第41図1、2はSD10の出土土器である。1は台付甕である。頸部で緩やかに括れ、胴部上位で膨らんで、下半部が丸みを帯びて底部にいたる。口縁部は外反しながら開き、口唇部でキザミ目がつく。最大径は口縁部となり、胴部の膨らみをやや上回る。外面の調整は、口縁部が縦方向、胴部が斜方向の木口ナデが施され、

底部では縦方向にナデが加えられる。内面は胴部から口縁部まで横方向の木口ナデが施される。

2は壺形土器の複合口縁である。器面が摩耗していて不明瞭だが、口唇部には斜縄文、口縁部には羽状縄文が施文され、6本の棒状浮文がつく。棒状浮文と内面が赤彩される。

第42図1～11はSD11の出土土器である。1～4、6～8、10、11は壺形土器である。

1は、ほぼ全容が復元できる壺形土器である。頸部から口縁部にかけて立ち上がりながら外反し、幅の狭い複合口縁になる。胴部上半部でやや膨らみながら胴部中位で最大径になり、直下でやや段をつけて直線的にすままる。文様帯は口縁部内面、複合口縁部、胴上

半部の3ヶ所になる。まず口縁部内面はRL縄文、複合口縁部はLR縄文が施文され、两部分をあわせて羽状縄文が構成される。胴上半部は4段の縄文施文によって羽状縄文が構成され、上から3段目は附加状縄文となる。各段の縄文の下端にはS字状結節文が1条ずつ廻る。内面の口縁部無文部から頸部、外面の頸部、胴部無文部はよく磨きが施され、赤彩される。

2は幅広の複合口縁となり、頸部で緩やかに括れる。口唇部には斜縄文、口縁部には羽状縄文が施文され、S字状結節文が1条廻る。4ヶ所に6本1組の棒状浮文がつき、口縁下端には連続キザミ目が廻る。下部にS字状結節文に区画された胴部文様帯がわずかに観察される。内外面全部分が赤彩される。

3は胴上部に4段の斜縄文による文様帯を構成する。外面頸部無文部と頸部内面が赤彩される。

4は広口壺になるものと思われる。頸部はくの字状に括れ、口縁部は直線的に外に開く。器面調整は、口縁部は斜方向の木口ナデ、胴部は斜めまたは縦方向の磨き加えられる。内面は横方向の木口ナデが施される。内外面ともに赤彩される。

6、7は壺の底部である。8は広口壺の破片で、幅の狭い無文の複合口縁になる。10、11は壺の胴部破片で、10は鋸歯状沈線で縄文が区画され、無文部分が赤彩される。11は羽状縄文の下部が2条のS字状結節文で区画され、無文部は赤彩される。

5、9は、甕形土器である。5は台付甕の脚台部で、裾部がやや外反しながら開く。9は、甕の口縁部から胴部にかけての破片である。器面調整は、外面が斜方向の木口ナデ、内面は横木口ナデが施される。口唇部は平坦になる。

第43図1~10はSD15の出土土器である。1は壺形土器の複合口縁部分であり、口唇部に斜縄文、口縁部には羽状縄文が施文され、キザミの加えられた4本1組の棒状浮文がつく。径11mmの円形朱文が口縁部と口唇部に廻る。

2は無文の広口壺で、頸部が緩やかに括れ、内外面が赤彩される。

3、4は口唇部にキザミ目が廻る台付甕である。3は内外面ともに横ナデ調整である。4は口唇部が平坦に面取りされた後、キザミ目が加えられる。器面調整は、外面では口縁部が横ナデ、胴中位が横方向の木口ナデ、胴下半部が縦方向の木口ナデである。内面では口縁部から胴中位では横方向の木口ナデ、胴下半部では横方向の木口ナデの後、縦方向の木口ナデが加えられる。

5は高環である。口縁部で内面に稜をもってやや外傾し、外面で折り返し上に段を持つ。段の部分にはキザミ目が加えられる。口縁部は両面とも横ナデされ、胴部外面はよく磨かれる。胴部内面には横方向の木口ナデが施される。

6は小型の壺形土器で、肩部がやや張って、胴下部で最大径になり、稜をもって底部に至る。肩部の文様帯は羽状縄文で下端は2条のS字状結節文で区画される。胴部無文部は横に磨かれる。

7は無文の壺の胴下半部だが、内面がよく調整されており小型の環として2次的に使用されたものか。

8~10は壺の口縁部破片である。8は大きく外反して外側に折り返され、口唇部にキザミ目が加えられる。9は複合口縁で、棒状浮文が4本つく。10は幅の狭い複合口縁で、4本の短い棒状浮文がつく。口縁には斜縄文、内面には羽状縄文が施文される。

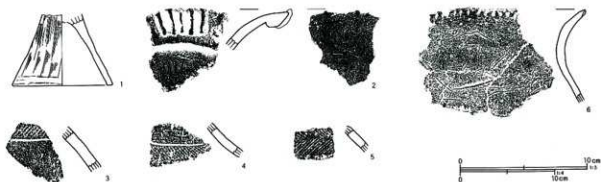
第12・13号溝 (第38図)

B-2グリッドに位置する。両溝ともに古墳跡SS1に切られ、SD12は近・現代の井戸跡SE2に切られる。SD12は幅0.6m、深さ64cm、SD13は幅0.6m、深さ27cmを測る。両溝とも覆土中から土師器片が少量出土した。伸びる方向から、SD11またはSD17の一部だった可能性もある。

第17号溝 (第38・44図)

B-3グリッドに位置する。古墳跡SS1に切られる。南西側にやや弧を開くようにかすかにカーブしてのびており、SD10の手前で途切れる。北西部にのびる延長上にはSD12・13があり、どちらかの溝につながっていたかも知れない。溝の幅1.0m、深さ32cmを測

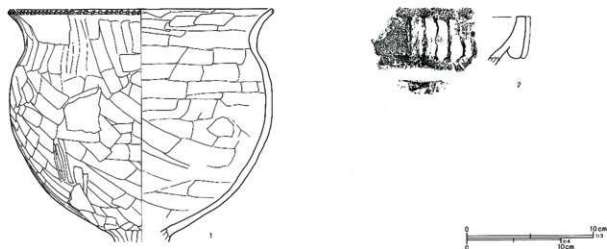
第40図 第7号溝出土遺物



第7号溝出土遺物観察表 (第40図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	台付甕			(10.7)	W	明褐	A	50	口縁部 赤彩(頸部 内面無文部) 胴部 胴部 胴部 口縁~胴部
2	壺				W雲	明褐	A		
3	壺				褐	褐	A		
4	壺				褐	にぶい黄腹	A		
5	壺				W	黒褐	A		
6	甕				褐	黒褐	B		

第41図 第10号溝出土遺物



第10号溝出土遺物観察表 (第41図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	台付甕	28.5	(31.0)		褐	暗赤褐	A	80	口縁部 赤彩(棒状浮文・内面)
2	壺				W	にぶい褐	A		

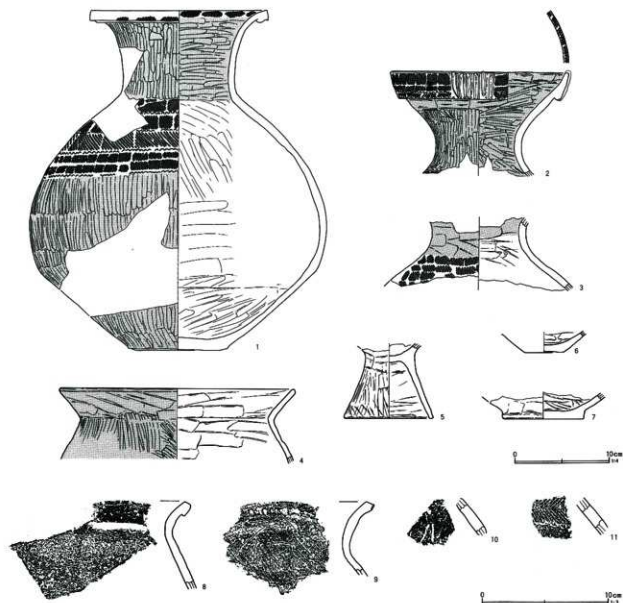
る。覆土中から弥生時代後期から古墳時代前期の土師器片が少量出土した。

出土土器 (第44図)

1は壺の口縁部破片で、無文の折り返し口縁である。

2は壺の胴部破片で、斜縄文の上端は区画されず、上部の無文部は赤彩される。3は甕の口縁部破片である。口唇部が平坦になり、器面調整は両面ハケメである。

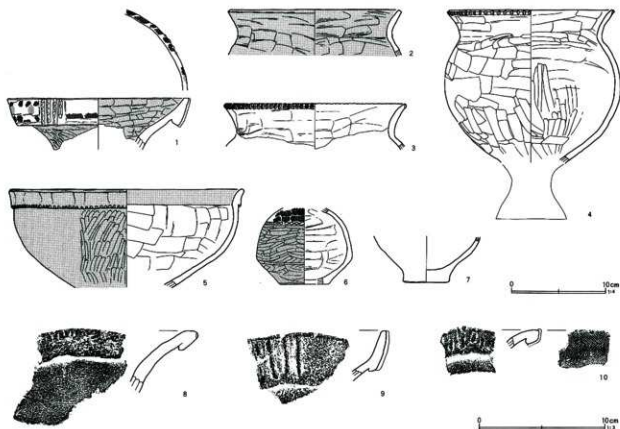
第42図 第11号溝出土遺物



第11号溝出土遺物観察表 (第42図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺	18.8	36.0	10.6	W褐	にぶい黄橙	A	60	
2	壺	19.2				砂	赤褐	A	
3	壺				褐	明褐	A	70	
4	壺	(25.2)			褐	明赤褐	B	20	
5	台付甕			9.5	W	明赤褐	A	100	
6	壺			4.0	W	浅黄橙	A	50	
7	壺			8.6	W褐	橙	A	45	
8	壺				褐	にぶい褐	B	口縁～胴部	
9	甕				W褐	にぶい褐	B	口縁～胴部	
10	壺				褐	褐灰	A	胴部 赤彩(無文部)	
11	壺				W	にぶい黄褐	A	胴部 赤彩(無文部)	

第43図 第15号溝出土遺物



第15号溝出土遺物観察表 (第43図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺	(19.5)			W褐	明褐	A	25	口縁～頸部 口縁部 口縁部 赤彩(頸部・内面無文部)
2	広口壺	(18.6)			W雲	赤褐	A	20	
3	台付甕	(19.5)			W	明褐	A	25	
4	台付甕	17.9	(22.1)		W褐雲	黒褐	A	70	
5	高坏	25.1			褐雲	赤褐	A	70	
6	小型壺			(5.3)	R	灰黄	B	40	
7	壺			5.0	W褐	褐	B	80	
8	壺				褐	明赤褐	B		
9	壺				R	明褐	B		
10	壺				褐雲	にょい褐	A		

第44図 第17号溝出土遺物



第17号溝出土遺物観察表 (第44図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺				褐	にょい黄橙	B		口縁部
2	壺				W雲	赤褐	A		胴部 赤彩(無文部)
3	甕				褐	黒褐	B		胴部 赤彩(無文部)

(2) 土壌 (第45・46図)

第1号土壌

D-2グリッドに位置する。SR2、SR5を切つて構築されており、この土壌はSR2、SR5より新しい。平面形は長方形である。規模は、長辺1.1m、短辺0.5m、深さ50cmである。長辺方位はN-25°-Wを測る。底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は炭化物と焼土粒子をわずかに含む暗褐色土である。覆土中から土器片が少量出土した。

第2号土壌

C-5グリッドに位置する。SS1に切られており、この土壌はSS1より古い。平面形は楕円形である。規模は、長軸は推定で2.2m、短軸は推定で1.4m、深さ50cmである。長軸方位はN-72°-Wを測る。底面は平坦で、壁はやや開いて立ち上がる。覆土は黄褐色ブロックを少量含む暗褐色土である。覆土中から土器片が少量出土した。

第3号土壌

E-3グリッドに位置する。平面形は長楕円形である。規模は、長軸は推定で2.3m、短軸0.9m、深さ27cmである。長軸方位はN-0°を測る。底面は船底状となり、壁面はなだらかに立ち上がる。覆土は黄褐色粒子を多量に含む暗褐色土である。覆土中から第46図1、4が出土しており、他にも古墳時代前期の土器片が多く出土した。1は埴で、篋磨きが密に施され丁寧な仕上がりになっている。4は壺の複合口縁で、撚りの細かいLR縄文を施文、口縁下端にはキザ目を連続させる。内面は無文である。遺構の時期は、出土物から古墳時代前期であると思われる。

第4号土壌

E-9グリッドに位置する。平面形は不整形円形である。規模は、長軸2.5m、短軸2.0m、深さ35cmである。長軸方位はN-25°-Wを測る。底面は中央やや南より部分が皿状に浅く凹む。覆土は炭化物と焼土粒子を少量含む暗褐色土であるが、中層で黄褐色土が堆積しており、埋め戻した可能性が高い。覆土中から小型高環の破片(第46図2)が出土した。遺構の時期は、

出土遺物から古墳時代前期であると思われる。

第5号土壌

F-8グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.1m、深さ37cmである。底面は中央でやや凹むがほぼ平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。覆土は黄褐色ブロックを少量含む暗褐色土である。覆土中から土器片が少量出土した。

第6号土壌

E・F-8グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.0m、深さ16cmである。底面はほぼ平坦であり、壁はやや開いて立ち上がる。覆土は黄褐色ブロックを多量に含む茶褐色土である。覆土中から土器片が少量出土した。

第7号土壌

D-3・4グリッドに位置する。平面形は不整形長方形である。規模は、長辺5.8m、短辺1.1m、深さ37cmである。長辺を主軸とする方位はN-29°-Eを測る。底面は平坦であり、壁はやや開いて立ち上がる。覆土は黄褐色ブロックを多量に含む暗褐色土である。覆土中から第46図5が出土した。5は台付甕の破片で、頸部は緩やかに括れ、内面には稜を持たない。口唇部にはキザミ目、器面調整は内外とも木口ナデである。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期末から古墳時代前期初頭であると思われる。

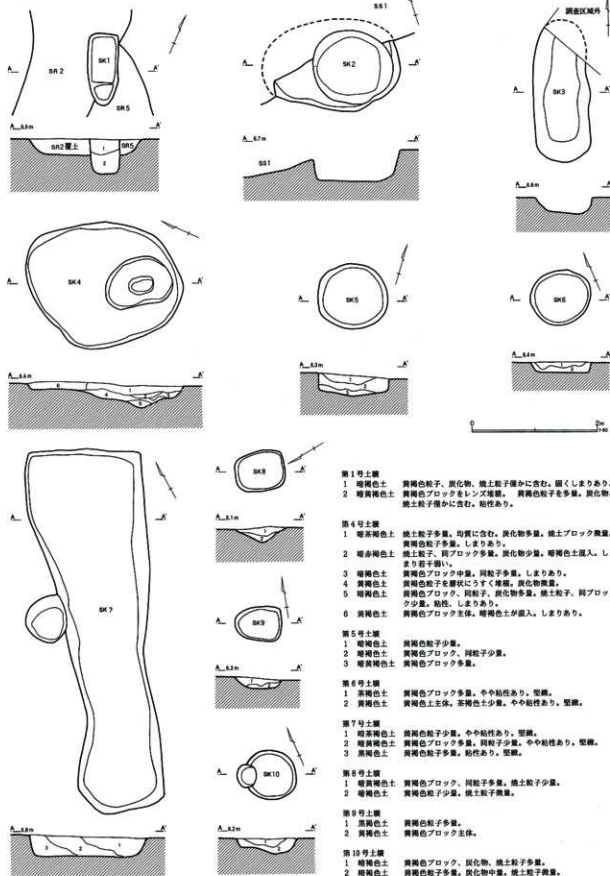
第8号土壌

E-9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ26cmである。長軸方位はN-29°-Eを測る。底面は掃鉢状に浅く凹む。覆土は焼土粒子を少量含む暗褐色土である。覆土中から高環の破片(第46図3)が出土したことから、遺構の時期は古墳時代前期であると思われる。

第9号土壌

E-9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長軸0.7m、短軸0.5m、深さ19cmである。長軸方位はN-10°-Eを測る。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は黄褐色粒子を多量に含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第45図 土壌



第1号土層

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子、炭化物、焼土粒子層中に含む。固くしりあり。
- 2 暗褐色土 黄褐色ブロックをレンズ増殖。黄褐色粒子を多量。炭化物、焼土粒子層中に含む。粘性あり。

第4号土層

- 1 暗褐色土 焼土粒子多量。均質に含む。炭化物多量。焼土ブロック微量。黄褐色粒子多量。しりあり。
- 2 暗赤褐色土 焼土粒子、同ブロック多量。炭化物少量。暗褐色土混入。しり若干強い。
- 3 暗褐色土 黄褐色ブロック中量。同粒子多量。しりあり。
- 4 黄褐色土 黄褐色粒子を層状にうすく増殖。炭化物微量。
- 5 暗褐色土 黄褐色ブロック、同粒子、炭化物多量。焼土粒子、同ブロック少量。粘性。しりあり。
- 6 黄褐色土 黄褐色ブロック主体。暗褐色土が混入。しりあり。

第5号土層

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子少量。
- 2 暗褐色土 黄褐色ブロック少量。
- 3 暗黄褐色土 黄褐色ブロック多量。

第6号土層

- 1 黄褐色土 黄褐色ブロック多量。やや粘性あり。堅固。
- 2 黄褐色土 黄褐色土主体。赤褐色土少量。やや粘性あり。堅固。

第7号土層

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子少量。やや粘性あり。堅固。
- 2 暗黄褐色土 黄褐色ブロック多量。同粒子少量。やや粘性あり。堅固。
- 3 黄褐色土 黄褐色粒子多量。粘性あり。堅固。

第8号土層

- 1 暗黄褐色土 黄褐色ブロック、同粒子多量。焼土粒子少量。
- 2 暗褐色土 黄褐色粒子少量。焼土粒子微量。

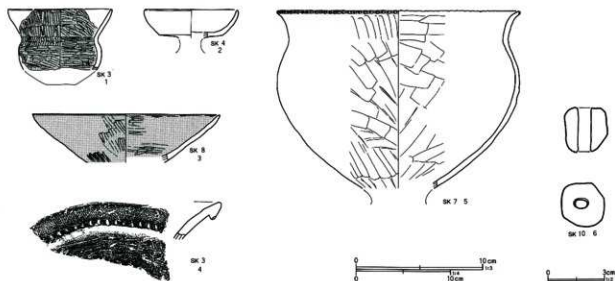
第9号土層

- 1 黄褐色土 黄褐色粒子多量。
- 2 黄褐色土 黄褐色ブロック主体。

第10号土層

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロック、炭化物、焼土粒子多量。
- 2 暗褐色土 黄褐色粒子多量。炭化物中量。焼土粒子微量。

第46図 土壌出土遺物



土壌出土遺物観察表 (第46図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	埴	(11.2)	(8.0)		W	黄橙	A	25	SK 3
2	高坏	(10.1)			BW	明赤褐	A	30	SK 4
3	高坏	(20.0)			W	明赤褐	A	15	SK 8
4	壺				W	にふい橙	A		SK 3 口縁部
5	台付甕	(26.0)			B褐	暗赤褐	A	15	SK 7
6	土玉	直径2.3cm	長さ2.4cm	孔径7mm				100	SK 10

第10号土壌

F-9グリッドに位置する。平面形は円形である。直径0.9m、深さ28cmを測る。底面は不安定で、壁はゆるやかに立ち上がる。西側にビットが伴う。覆土は炭化物と焼土粒子を多量に含む暗褐色土である。覆土中から土玉(第46図6)と少量の土器片が出土した。

(3) ビット (第47~50図)

単独のビットは全部で29基検出された。C-5・6グリッドを中心とする調査区南部と、E-8グリッドを中心とする南東部に分布する。調査区南部の分布域ではSR1、SR11、SR12などと重複する。掘立柱建物跡を想定できるようなビット間の規則的配列や、SR1、SR12などに伴うような位置的関係は認められなかった。調査区東西部の分布域ではSR14とSR10の間にそれぞれ単独に位置する。

ビットの平面形は、円形または楕円形であり、直径または長さ30~50cm代が大半で50cm代が最も多い。深

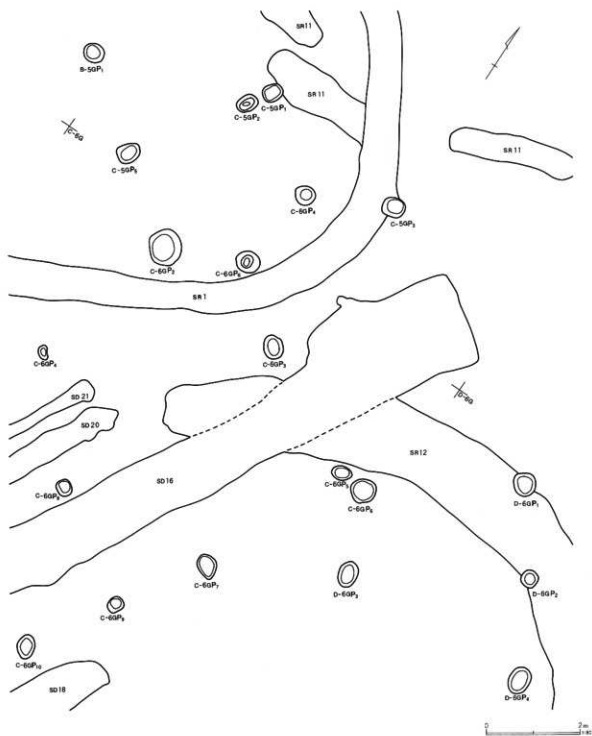
さは20~30cm代である。覆土は暗褐色土または黒褐色土である。

E-8GP₂からは、古墳時代前期の甕形土器(第49図1)が出土し、C-5GP₃、C-6GP₂からは、それぞれ弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が多く出土した。その他のビットでは遺構の時期を決定づける遺物は出土していないため、遺構の時期は明確にできないが、覆土の状況が弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構である周溝や覆土に近似することから、この時代の遺構であると考えられる。

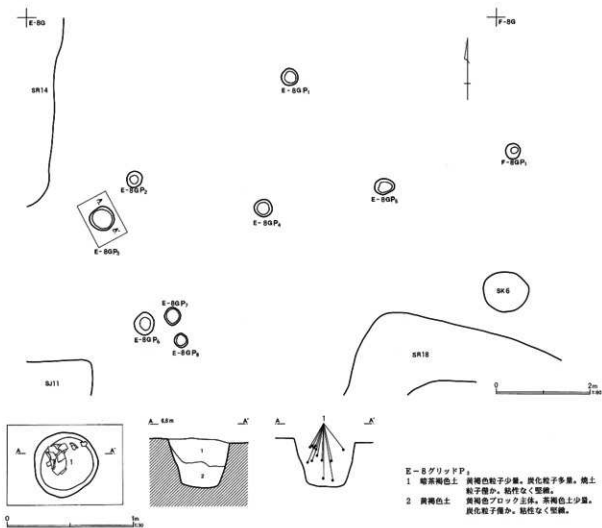
出土遺物 (第49図)

2点ともE-8GP₃からの出土土器である。1はS字状口縁の台付甕である。胴部外面は斜方向のハケメが施される。胴部内面は横方向の木口ナデで、頸部直下から胴上部には指頭による押さえ痕が見られる。2は高坏の口縁部破片である。内外面に丁寧な篋磨きが施される。

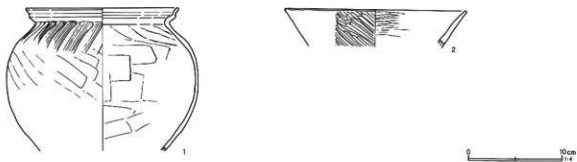
第47図 ビット (1)



第48図 ビット (2)



第49図 ビット出土遺物



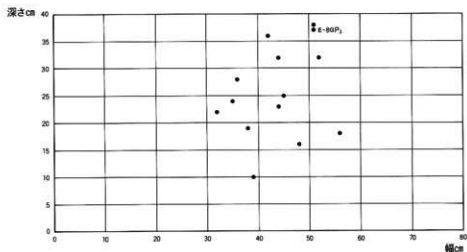
ビット出土遺物観察表 (第49図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	台付甕	16.2			BW	にふい橙	B	70	E-8 GP ₃
2	高杯	(19.5)			BW雲	橙	B	30	E-8 GP ₃

ビット観察表

遺構名	平面形	直径・長径	深さ	覆土	出土遺物	時期・備考
B-5GP ₁	楕円形	46cm	29cm	暗茶褐色土		
C-5GP ₁	楕円形	45	25	暗茶褐色土	土師器片少量	
C-5GP ₂	楕円形	44	23	暗茶褐色土	土師器片少量	
C-5GP ₃	楕円形	51	38	黒褐色土		
C-5GP ₄	円形	44	32	黒褐色土	土師器片少量	
C-5GP ₅	楕円形	52	32	暗茶褐色土	土師器片多量	弥生時代後期～古墳時代前期
C-6GP ₁	楕円形	52				
C-6GP ₂	楕円形	76		黒褐色土	土師器片多量	弥生時代後期～古墳時代前期
C-6GP ₃	楕円形	50		黒褐色土		
C-6GP ₄	楕円形	32		茶褐色土		
C-6GP ₅	楕円形	44		黒褐色土		
C-6GP ₆	円形	56	18	黒褐色土		
C-6GP ₇	楕円形	55		茶褐色土	土師器片少量	
C-6GP ₈	楕円形	37		暗茶褐色土		
C-6GP ₉	楕円形	36		黒褐色土	土師器片少量	
C-6GP ₁₀	楕円形	52		暗黄褐色土	土師器片少量	
D-6GP ₁	円形	50				
D-6GP ₂	円形	37				
D-6GP ₃	楕円形	57				
D-6GP ₄	楕円形	58				
E-8GP ₁	円形	36	28	暗茶褐色土		
E-8GP ₂	円形	35	24	暗黄褐色土		
E-8GP ₃	円形	51	37	暗茶褐色土	台付甕・高坏破片	古墳時代前期 旧名P ₁₆
E-8GP ₄	円形	38	19	暗茶褐色土		
E-8GP ₅	楕円形	42	36	黒褐色土		
E-8GP ₆	円形	48	16	茶褐色土		
E-8GP ₇	円形	39	10	暗茶褐色土		
E-8GP ₈	円形	32	22	茶褐色土		
F-8GP ₁	円形	33				

第50図 ビット計量グラフ



3. 古墳時代後期

第1号墳 (第51～57図)

調査区北西部に位置する。墳丘部は調査以前から削平されており、表土を除去した時点で、円形に巡る周溝だけが確認された。周溝の西側部分は調査区外におよび、周溝が囲む内側から周溝南東部にかけて、広範囲に攪乱される。構築時は円墳だったと考えられる。

他の遺構との重複関係では、近・現代の遺構であるSD4・5、SE1・2に切れ、調査区北西部に密集する弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構である周溝や溝を、多数破壊して構築される。

円形に巡る周溝の外径は29m、内径は20mを測る。周溝の上幅は4～5.4m、底幅は3.2～4m、深さは40～60cmを測る。周溝の底面はほぼ平坦であり、外側の壁はやや開きぎみに立ち上がり、内側の壁は北部から東部にかけてややなだらかに立ち上がる。周溝の覆土は、上層が混入物をほとんど含まない黒色～黒褐色土、下層が黄褐色粒子を含む暗褐色土である。

周溝の覆土内からは多量の遺物が出土した。このうち土師器の壺形土器 (第56図77)、須恵器の大甕破片 (81～84) は覆土下層からそれぞれまとまって出土した他、長頸瓶 (79)、土師器杯 (70～75) などが出土しており、これらが本遺構に関係する時期の遺物であると考えられる。このほか、重複する周溝や溝に関連すると思われる弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が多量に出土した。また、調査区南部に分布する住居跡に関係すると思われる奈良・平安時代の須恵器杯が出土した。(第57図90～98) 周溝内の同一の攪乱からは、近世の遺物が一括出土した。(99～102)

出土遺物

第1群 (第54・55図1～69)

弥生時代後期から古墳時代前期までの遺物について一括する。第1号墳の周溝が埋まる過程で流れ込んだものである。図化したものも含めて、全て破片である。

1～6、39～59は壺型土器である。1は複合口縁であるが、口唇部が横に面取りされ、外面が縦ハケメ後、横磨きを施すなど特徴的である。3は頸部から胴部破

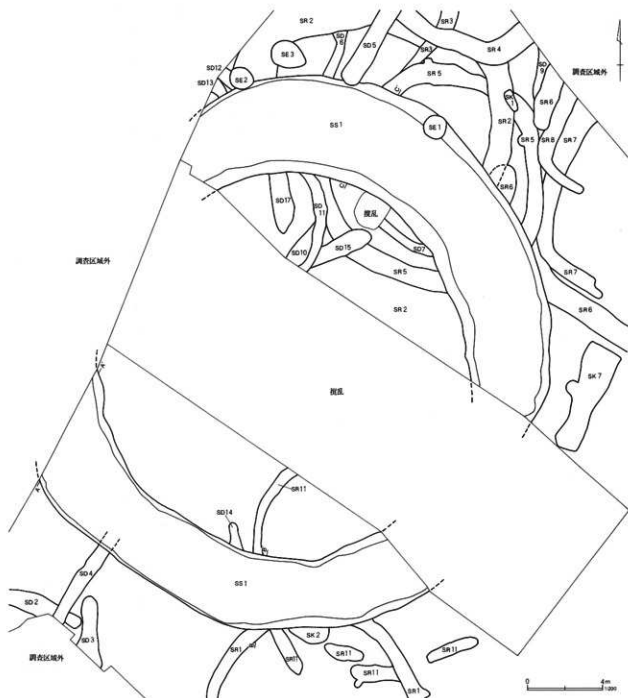
片で、頸部直下に断面三角形の突帯が巡る。4は二重口縁壺で、内外面ともにハケメの後、丁寧な磨きかなされる。5、6は大きく開く口縁部で、6は頸部が強く屈曲する。

39～41は複合口縁の壺である。39は口唇部に擦りの細かいRL縄文、口縁部に羽状縄文を配し、口縁下端にはハケ状工具によるキサミを施す。頸部には縦磨き、内面は横、斜め方向の磨き調整される。40は口唇部は無文だが、口縁部には雑に羽状縄文を配し、棒状浮文が5本貼り付けられる。41は口唇と口縁部に縄文、棒状浮文は4本である。42は幅の狭い複合口縁で、口縁と内面に縄文を配し、口縁下端にハケ状工具によるキサミがつく。口縁と内面に径9mmの円形朱文がつく。43は無文の折り返し口縁で、やや大型の厚手の壺になる。内面はよく磨かれている。44は厚手の折り返し口縁で、口縁部は指で軽く横ナデされるだけで、口唇部にはハケ状工具によるキサミがつく。45は無文で幅狭の折り返し口縁で、口唇部が水平に面取りされ、口縁下端にキサミがつく。46は口縁部に網目状捺文が施される。

47～59は壺型土器の頸部下位から胴部上半にかけての破片である。47、52～59は羽状縄文帯を結節文で区画するもので、47は4段の燃りの細かい単節縄文で羽状を構成し、縄文帯の下端を3条のS字状結節文を巡らせて、下位の赤彩無文部から区画している。無文部は非常に密に磨かれる。55は縄文帯上端を2条、56、57は下端を2条、58は6条の結節文で区画する。52～54、59は羽状縄文の各段に結節文が巡る。53、54、59には円形朱文がつく。48、49は頸部直下にボタン状貼付文がつくものである。50は先端の鋭く細い工具で鋸歯状沈線を施文するもので、沈線の下位には赤彩無文部が区画される。51は頸部から胴部上位にかけて縄文帯が2帯巡るもので、破片上部にかすかに上位の縄文帯が見える。中間の無文帯は赤彩される。

7～18、60～68は白付甕である。8は口縁部が帯状に比写する。外面は口縁部のみ丁寧に横ナデし、頸部

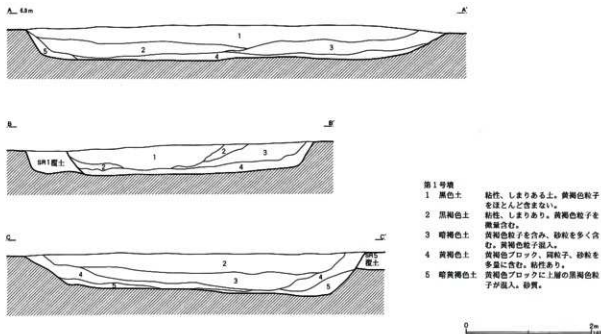
第51図 第1号墳



は縦ハケメ、胴部が横ハケメ、内面は横ハケメのままである。7、9、60~62は口唇部にキザミ目がつくもので、頸部が緩やかに括れる。7は内外面とも横～斜め方向の木口ナデ、9は外面が横木口ナデ、内面は細かい条のハケメ調整である。60は外面が口縁部で斜位、頸部で縦、胴部で横方向のハケメ調整、内面は口縁部で横ハケメ、胴部では丁寧なナデ調整を施す。61は内

外面ともナデ調整である。10、11、13、14、63~66は頸部がくの字状に屈曲する。10、11は外面がハケメ後に、胴部には斜位または横方向の木口ナデ、口縁部には内外面とも丁寧な横ナデが加えられる。14は口縁部に斜位のハケメ後、上半部を軽くナデ消す。63は口縁外面は丁寧に横ナデされ、内面は横ハケメのままである。64は口縁外面が斜位のハケメの後、上半部だけナ

第52図 第1号墳土層



テ消し、内面は密に横ナアされる。65は口縁部が内外面ともに横ハケメ後、軽く横ナアされる。13、66は幅広い口縁部が開くもので、66は口唇部が小さくびれ、口縁部は内外面ともに丁寧に横ナアされる。

12、67、68はS字状口縁の古付甕破片である。3片とも同じ角度で屈曲する。19～30、69は、高環の破片である。19は口縁部に3本の隆帯が張り付くもので、大きく内湾して胴部で膨らむ。内外面ともに密に磨かれ、赤彩される。20～22は若干内湾しながら開く環で、23は底部に段を持つ。24は体部が球状に膨らみ、口縁部が屈曲して開くもので、内外面とも丁寧に磨かれ、赤彩される。25は柱状脚部高環である。29は脚部で、底部との接合部に隆帯が走り、隆帯上には竹管状工具による連続刺突文が施される。30は口縁部に幅の狭い縄文帯を配し、口唇部にも縄文が施文される。下部の無文部と内面はよく磨かれ、赤彩される。69は口縁部が段上になり、口唇部と段部に連続刺突が走る。口唇部は平坦になる。

31～36は器台型土器の破片である。31、35は口縁が段を持って外反する。32はいわゆる特殊器台になると

思われる。33は口唇部近くで垂直に立ち上がる。

37、38は用途不明の鉄製品である。37は刃部を持つ。38は中央部で可動するように留めてある。

第2群 (第56図70～89)

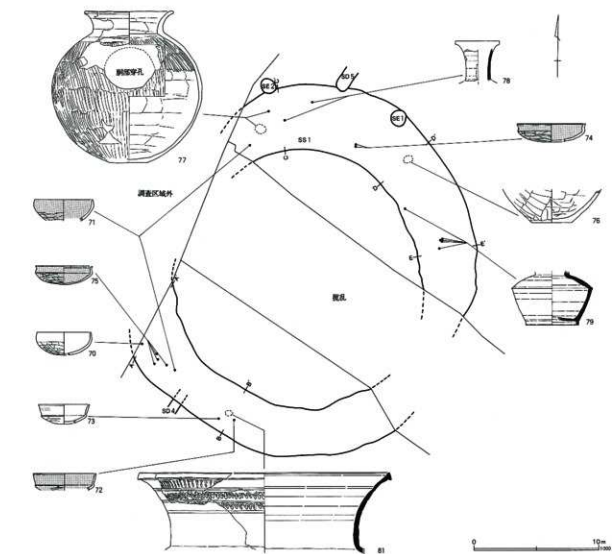
古墳時代後期の土器を一括する。SS1の遺構構築時または古墳祭祀に関係すると思われる遺物である。

70～75は土師器環である。70、71は口唇部がやや内傾ぎみに立ち上がり、体部外面が鋭削りされる。72、73は環蓋模倣環の破片、74、75は比企型環である。

76は甕形土器の胴下半部で、外面は斜方向に鋭削り、内面は横方向に鋭ナアされる。77は壺形土器で、胴部が球形に膨らみ、口縁部が外反する。胴部外面は縦方向の鋭磨き、口縁部は内外面ともに丁寧に横ナアされる。胴部内面は横方向の鋭ナア後、上半部のみ縦方向の鋭ナアが加わる。胴上半部には直径約10cmの焼成後穿孔が認められる。

78は長頸壺の頸部破片であると思われる。口縁に向かって外反し、下端では胴部に接続する屈曲部がわずかに残る。内外面に自然軸が付着する。79は長頸甕であると思われる。80は須恵器甕の口縁部破片である。

第53图 第1号墳遺物分布图



第54图 第1号墳出土遺物 (1)

